

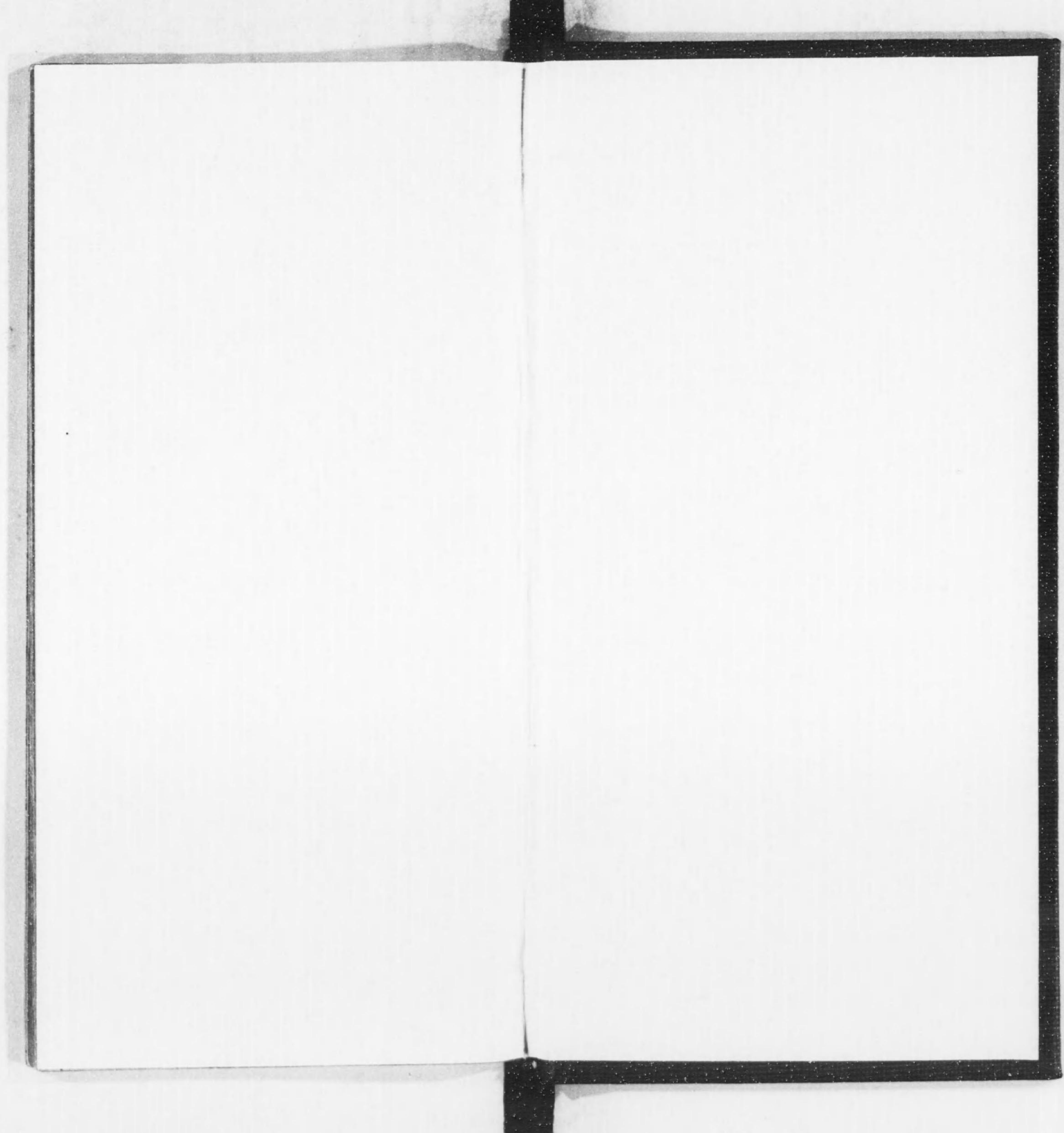
503
37

禁複写



始





ト2/N-32

503-37

酒井不二雄著

動的人格の修養

東京

啓文社發兌

大正
10 12.12
内交

自序

今日我が國民の思想は著しく動搖し低迷して、其の進むべき大道を踏外さうとしてゐる。文部省が全國の男女中等學校生徒に就いて調査した思想の傾向を見るに、

- (1) 現實的打算的にして物質的利益に敏にして沒我的公共的精神が薄くなつた事
- (2) 射倖心強く、輕佻浮薄となり、堅實剛健の氣象に乏しくなつた事
- (3) 禮讓、信義、服從の精神が薄くなつたこと
- (4) 虚榮、奢侈の風が盛になつた事

(5) 神佛偉人及び師長に對する敬虔の念と謝恩の心が薄くなつた事

などを數へて居るが、之等の弊風は確かに國民思想動搖の反動と見るべき事實である。そして一にも二にも「金だ」「金だ」といふ物質主義と、「自分一己の利益の爲には何物をも犠牲にして顧みざる」利己主義とは實に其の核心をなしてゐるのである。

人間が所有慾を有する限り、又自立自活の生活をせねばならぬ限り、物質を尊重することは決して悪いことではない。併し人間は物質を獲得し蓄積すると同時に、又人間らしい人間となることを忘れてはならぬ。即ち人格を尊重し修養し、且その個性の發展に對しても亦十分に注意を用ひなければならぬ。否、これは物質的満足よりも更に重大にして且最も先決を要する急務であらねばならぬ。たとひ幾千萬の富を有し、如何に優秀な學才手腕を有するも、其の人格にして陋劣なるものは殆ど人間としての價值がない。人間としての價值なき者は單なる一箇の獸格の存在に過ぎないのであるが、世間には動もすれば獸格を縦横に發揮して、以て成功者と目され、且自任してゐる者さへある。物質を過重する時、斯うした誤れる價值判斷が起る。これ風教上大いに慨すべきことであるが、一世の人心滔々として此の弊竇に墮し、人格の光の金の光よりも優ることを辨へぬ者が未だ依然として多い。

元來人格の修養とは兎角獸格に墮し易き人格をして靈格にまで引上げることがを意味するが、其の内容は飽くまで動的でなければならぬ。即ち從來の形式的な靜的な方法を捨て、たとひ偽惡者たるの譏を受け惡人たることを自識す

るとも大いに精進力行して自己の共同團體たる社會に對して其の誠を致さなければならぬ。單に惡事をしないといふ様な消極的な考で自分一人の徳を守るだけでは可くない。自ら進んで善事をなし以て小にしては自己を創造し完成し、大にしては社會に奉行し、國家の文化に寄與する所がなくてはならぬ。本書は私が諸書を涉獵繙讀の際、自ら修養の資料として蒐集して置いたものゝ中から抜録したもので、今日となつては其の出處の不明なものが極めて多いが、中には先輩諸君の著書から其の儘採集したものもあるかも知れない。此の點は豫め明瞭にお斷りして置く。又此の中には親友東京高等師範學校教官黒沼勇太郎君から提供された材料も亦頗る多いことを記して、同君に深く謝意を表明するのである。

要するに私は常に人格の動的內容と其の修養に就いて考へて居る者で、多少の意見を有つてゐるが、之を正面より論議するよりは先づその精神的食糧の必要を痛感し、此にこの事を論述したのである。そして其の校正は之を校了とする前、私の友人たる某小學校の教師、瓦斯電氣の職工、某新聞記者に内示して其の無遠慮な批評と周到な斧正とを乞ひ、剩さへ其の人々の意見に基づいて全然抹消し補入した部分すら六七個處はある。讀者諸君にして進んで本書の爲に、否社會奉仕の爲に修養の好資料を提供し苦言を呈されるならば著者は甘んじて之を受容し、以て其の内容を一新せんと欲する者である。兎に角本書は正面より修養を論じたものでなく、當代青年男女の精神的血肉を肥さんが爲、自己教育、魂の再造より見て廣く其の動的修養に關する資料

を供給したのである。それ故、能く其の旨趣を考へて忠實に通讀するならば
蛙のそらごと可笑しく面白き中に必ず心の糧たるべき厚滋を見出されるであ
らうと信ずるのである。

大正十年十二月

著者識す

動的人格の修養 目次

動的人格の内容と其の修養	一
大富豪の遺言	一
いろくの變木	二
幸運の神	七
動的修養の萌芽	八
うなぎ筋	八
缺點を鞭打て	九
~~~~~	
金持と貧乏者の相違	一〇
好機の正體	一一
財産は上へ漏る	一二
三十一文字の噴嘩	一三
銀製の茶器	一八
夫婦和合の秘訣	一九

目次

一

四休居士……………二〇

美衣美服……………二二

安樂の傳授……………三三

物のあはれ……………三三

彌次郎兵衛式處世法……………三七

多辯の戒め……………三二

衛生の大道……………三二

禁酒の癪……………三三

苦しまぎれの信仰……………三四

座右の銘……………三六

誘惑の力……………三七

金の逃げ出す聲……………三八

開きかけたる紙入の口……………三九

長生きに術なし……………四〇

産兒制限の一理由……………四二

懐中鏡……………四二

理窟と道理……………四三

共榮共存の男女……………四四

金錢の爲の結婚と戀愛の爲の結婚……………四六

花中の鶯囀……………四七

展角の頓悟……………四八

峨山禪師の法衣……………四九

貸せとは返す心が……………五一

良寛の三嫌……………五二

神に返れ……………五五

女と道……………五六

假りの世……………五七

使ふ人と使はるゝ人……………五八

人生は芝居の如し……………五九

學び易き偉人の惡徳……………六〇

未練を残すな……………六一

心の鏡……………六二

慾は人間の勁敵……………六三

最も簡単な強壯法……………六四

あし刈り小舟……………六五

自ら待め……………六七

山本勘助の遺訓……………六九

嫉妬の手加減……………七〇

怒るな……………七三

歸る故郷……………七五



目次

修養の力……………七  
 幸福の日……………七  
 孤雁の畫賛……………七  
 女心……………七  
 善惡是非の判断……………七  
 戀と徳との追分道……………七  
 論曲の三病……………七  
 人生の見方……………七  
 大事に處する態度……………七  
 出すぎるな……………七

四

飲食の戒め……………八  
 臨終の袋……………八  
 前世と後世……………八  
 辭世のさまじく……………八  
 笑つて暮せ……………八  
 身即成佛……………八  
 惚薬……………八  
 婦人の寶冠……………八  
 成功者の資格……………八  
 益軒の六本……………八

目次

八括り……………一〇一  
 座禪の三不足……………一〇一  
 金貨の人物鑑定法……………一〇三  
 喜の配當……………一〇四  
 老病死……………一〇五  
 六人の盜賊……………一〇八  
 一道上人のいろは歌……………一〇九  
 謙遜の餘裕……………一一〇  
 酒のいれもの……………一一二  
 處世藥秘方……………一一三

五

心の闇……………一一三  
 一念の轉處……………一一四  
 伊達政宗の修養……………一一五  
 動中の靜、靜中の動……………一一六  
 夫の改心……………一一七  
 シーザーの克己……………一二八  
 當意即妙……………一二〇  
 人生の長短……………一二一  
 目が物を言ふ……………一二二  
 風小僧次郎吉と金錢の貸借……………一二三

病氣と弱味……………一三五

毀譽褒貶……………一三六

致富の要訣……………一三七

否の一語……………一三八

心の内の亂髮……………一三九

融通無碍の境地……………一四〇

口は幸福の門……………一四一

金の世の中……………一四二

貧乏の讚……………一四三

金錢は惡魔の如し……………一四七

男の見た女、女の見た男……………一三八

心を直せ……………一三九

信長、秀吉、家康の優劣と成功の秘訣……………一四〇

學問の中毒……………一四一

空虚な頭……………一四二

蜀山人の禁酒……………一四三

心の若さ……………一四四

物は見様……………一四五

論語讀ますの論語知らず……………一四六

四句分別……………一四七

親切第一……………一五一

立身すべき天運……………一五二

一條の退路と出路……………一五三

夫婦がため……………一五四

金が欲しくば……………一五五

お口の用心……………一五六

迷の絆……………一五七

福の神と貧乏神の託宣……………一五八

品性のみ人を救ふ……………一五九

急ぎの手紙……………一六〇

主義の爲の免職……………一六一

金のなる木……………一六二

惡中の善、善中の惡……………一六三

米大統領グラランドの大量……………一六四

商道……………一六五

立身と亡身……………一六六

故郷は忘れ難し……………一六七

安住の樂天地……………一六八

親芋の慈悲……………一六九

孝行の諷刺……………一七〇

目次

孝子鶴女……………一七  
 汝の心を制せよ……………一七  
 死は最も確な事實……………一八  
 贅澤な貧乏人……………一八  
 空の鳥を見よ、野の百合を見よ……………一八  
 初一念……………一八  
 金儲の秘訣……………一八  
 人道は水車の如し……………一九  
 東阜心越禪師の大膽……………一九  
 堪忍の價……………一九

八

松平樂翁の壁書……………一九  
 昨日の大家……………一九  
 悠々行路の心……………一九  
 利久の風流……………一九  
 蟹と海鼠……………一九  
 一目の羅……………一九  
 ソクラテスの無知……………一九  
 下劣な心……………一九  
 小人の常……………一九  
 貴婦人の涙の價……………一九

目次

福因を蒔け……………二〇  
 信仰の力……………二〇  
 欺かるゝ原因……………二〇  
 華山の商人訓……………二〇  
 勤勞即ち佛法……………二〇  
 痛快な借用證書……………二〇  
 生死無情の船唄……………二〇  
 貧乏の近道……………二〇  
 日目の別れ……………二〇  
 石に對する讃辭……………二〇

九

善惡應報の施行歌……………二〇  
 活動即人生……………二〇  
 ワン、プライズ、ショウアップ……………二〇  
 仙崖和尚……………二〇  
 迷はれば悟らす……………二〇  
 落選の祝宴……………二〇  
 大將十文字の釣合……………二〇  
 人生戦場の武器……………二〇  
 財慾と性慾……………二〇  
 憎惡の念……………二〇

目次

最善の勞働……………二四二  
 報徳教訓……………二四三  
 他人の缺點……………二四四  
 相互扶助の實現……………二四五  
 盜心を去れ……………二四六  
 純一無雜の心……………二四七  
 水戸光圀の壁書……………二四九  
 私心私情を去れ……………二五〇  
 井底の蛙……………二五一  
 利害關係の外に立て……………二五三

西洋の格言……………二五四  
 獨立自尊……………二六〇  
 心眼を開け……………二六一  
 寶丹翁の誓文……………二六三  
 志を立てよ……………二六四  
 人物修養の一大事……………二六六  
 自己以上の力……………二七〇  
 〇善惡の取捨決行……………二七二  
 早起と早寝……………二七三  
 根を培へ……………二七四

目次

一事に専念なれ……………二七五  
 感謝の法悦……………二七六  
 自他共樂……………二七八  
 細川忠興の人物觀……………二七八  
 心を信ぜよ……………二八二  
 西郷隆盛の遺訓……………二八三  
 學ぶべきデモクラシー……………二八六  
 明日主義の否定……………二八九  
 座忘と餘裕……………二九二  
 汝を頼め……………二九三

今日一日の勤め……………二九五  
 空財布を満たせ……………二九六  
 人生の悅樂……………二九八  
 吝嗇の業火……………三〇〇  
 無々と殘夢の問答……………三〇一  
 至誠の力……………三〇二  
 偶然王の他力……………三〇五  
 仙巖の畫賛……………三〇七  
 鞭の洗禮……………三〇九  
 屏風の教訓……………三一三

目次

成功は勇敢の子……………三三三

貪慾の利益……………三三四

自ら責めよ……………三三六

謙遜の徳……………三三七

正直……………三三八

雨森彦太郎の正直……………三三〇

若き心の所有者……………三三三

才智は深く藏せ……………三三三

肉慾的の人間……………三三四

己を責めよ……………三三五

一一一

無我の境……………三三六

天の報酬……………三三七

約束の骨子……………三三八

神の肖像……………三三八

轉徳利……………三三〇

嘘と誠……………三三三

心の悦び……………三三三

定まらぬ心と心の教……………三三四

大罪人の告白……………三三七

愛の生活……………三三六

目次

六つの憎み……………三三二

迷の中の迷……………三三三

習慣の力……………三三四

禁酒の頌歌……………三三五

自然に没入せよ……………三三六

人間の進路と運命……………三五一

道歌の教訓味……………三五三

今も汝の心に歌妓あるか……………三五八

一心決定の徹底……………三五九

新味ある三衛生訓……………三六一

一一三

百戦百勝の處世法……………三六一

人生の變り目……………三六二

信仰の力……………三六五

信仰の四階段……………三六六

智慧ある悪魔……………三六七

葛飾北齋の自跋……………三六八

求めよ與へられん……………三七〇

毎日我身を省りみよ……………三七二

安分知足の不文律……………三七五

心をよこすな……………三七七

眞の幸福を見出せ……………三六  
 吉宗公と日蓮宗……………三〇  
 名人の六大特性……………三一  
 獨帝の實業十誠……………三二  
 收入以内の生活……………三五  
 心の白粉……………三六  
 人生の旅行と希望……………三七  
 善事の報酬……………三八  
 禪の四料棟……………三九  
 目次終……………三九

宮本武藏の獨行道……………三九  
 働かぬ日本人……………三九  
 愛は神である……………三九  
 生れ甲斐のある生活と其の修養……………三九  
 縛々たる餘裕……………四〇  
 動的修養の平凡道德四十六ヶ條……………四〇  
 天分を知れ……………四〇  
 反省の力……………四〇  
 人の心の誠……………四〇  
 金錢以上の資本……………四〇

# 動的人格の修養

酒井不二雄著

## 大富豪の遺言

豊臣秀吉が政權を握れる頃、尾張國に野呂某といふ大金持が居た。金錢の慾は其の富が増せば増すほど深くなるものだと言ふてゐるが、此の男も亦其の例に洩れず、極めて吝嗇であつたが、一日其の病篤きに及び、

「俺が死んだら手を乗輿の外へ出して墓場へ連れて行け。」

と、皮肉な遺言を残して死んだ。此の皮肉の意味は斯うである。俺はこれ程の大金持ではあるが、死んでしまへば、此の通り空手である。つまり俺

の死を見て、あまり慾張るなどの意味深長な暗示であつたのだ。

貨幣經濟の時代に生き、黄金萬能の世の中に處するには無論金が必要である。併し總べての價值判斷の目安を金のみ置いて、年が年中、金の爲に働き、金の爲に苦しみ、而も之を善用せず、守銭奴の如く金の爲に死ぬ様では其の人生は極めて索寞であり、又無意味である。ゲーテ嘗て、

「人生は鑿石所である。吾々は其處より品性なるものを切出し、それを彫刻し、完成すべきである。」

と言つたが、此の言葉の意味を體驗する者は實に人生至上の幸福である。

### いろ／＼の變木

心學者協阪義堂の著に「銀のなる木の傳授」といふ本がある。變木屋なる一人の翁の口を借りて、修身齊家の大道を説いたものであるが、其の變木屋にどんな種類の珍木があるか。見給へ、どれもこれも實に珍しい變木ばかりであるから。即ち

某の曰く、成程是ははなの高くのびた木なり、名は何といふか。

主の曰く、此のはなの高くのびた木を高慢氣といふ。兎角、學者や推

人は此の高まん木が當前なりといふ。

某の曰く、彼のにぎやかに見ゆる木は何と申すぞ。

主の曰く、あの木は若い衆の好む木なり。元が酒氣にて、其の酒氣より遊び氣が出て、其の遊び氣が色氣となり、色氣より騒ぎとなり其

のさわぎより難木となり、また節季となりて滅氣、癩氣となり、終には親に勘氣となり、此の勘氣より仕方なきに至るなり。

某の曰く、あの向ふに根のゆがみ振れて見ゆる木は何と申すぞ。

主の曰く、その木の名は慾木といふ。あの慾木からずつと出るのが望

み木にて其の望み氣より勝負木、相場木が出て、剛氣となり悪氣と

もなり、又損氣、難木となりて、遂に貧乏の花が咲く。

某の曰く、向に見ゆる、あの小さき木よりは何が出ますぞ。

主の曰く、あの小さき木から出るが吝氣なり。其の吝氣より鬱氣が出

で、其の鬱氣より癩氣ともなり、短氣ともなる。又それより狂氣、

亂氣ともなり、歸ぬ氣も出れば、去る氣も出る。

兎角、今は世間に此のりん木や、欲木や、酒木や、色木や、遊び木や、高慢の木が繁昌して、何處にもなき所はムりませぬ。至つて育て易ければ、其方もいろくと吟味し給はずと、此の木をば求め給へ。

某の曰く、此の素直に長き樹は何と申すぞ。

主の曰く、それは正木といひ、何處までも眞直ぐにてゆがむ事なし

此の正直より出るのが實義と徳義、實義徳義より忠義も出て、孝行

木も出てます。又其の忠木孝木より出るのが仁義禮義にて、仁義禮

義より出る花が、見さッしやれ、あの富貴の花ぢや。何と見事なも

のぢやないか、あの富貴の花は四季共に落ちず、凋まず、衰へぬ故



に長命木とも常盤木とも申すが、また世に盛なる美しき、目出度き  
樹ではムらぬか。此の富貴長命木は至つて育て様がむづかし。酒の  
み過せば枯れ、色を食れば枯れ、慾が深ければ損じ、物に腹立て短  
慮なれば枯れてしまふ。又家業に不精なれば損じ、奢り吝かなれば  
枯れ、朝寝をすれば損じ易く、美食をなせば枯れ、足ることを知ら  
ざれば枯れ、格氣をすれば枯れ、不忠不孝は根から丸て失ふ。貴方  
は所詮はよう育て給ふことならざれば是非に止め給ふべし。

といふのであるが、斯く譬喩を以て平易に修養の心得を説いた所に捨て難  
い面白味がある。そのみならず、其の末段に於て若し此の富貴や長命が  
御望みならば、到底金銭では賣れないから「善を山ほど積みて來り給へ」

と述べてあるが、此の一句實に千金の重きをなしてゐる。

### 幸運の神

羅馬の一高僧曰く、

凡そ如何なる人にも一生の中に一度や二度は必ず幸運の神に見舞は  
るゝものなり。されど、若し其の人、單に此の福の神を驩迎するのみ  
にて其の機會を捕ふる準備せざれば、折角表口より入り來りたる福  
の神は直ちに裏口より逃げ出づるなり。準備なく、素養なく、また勇  
氣なき者は如何なる好機會に出逢ふとも、遂に之を利用すること能は  
ざるなり。

と。誠に至言である。幸運の神に見離されぬやう、否進んで、それを捕へるだけの不退轉の努力と、周到な用意とが必要である。

### 動的修養の萌芽

或人が其の子に對つて、

「兒よ、我は汝の品性を造ることが出来ない。汝の品性は之を汝自ら造れ。」

と戒めたが、此の訓言こそは實に自己教育の心核をなすもので、また動的修養の萌芽である。自己完成の第一歩は此の自覺に依ると言つてよい。

### うなぎ筋

山東京傳の人相鏡に、

うなぎ筋といふ筋あり。其の筋は多く江戸前の息子にあり。廣い世界を心から勘當の身となりて、狭き池船の中にさすらひ、口をばくばくするのみにて、一生ぬらりくらりと過し、親子兄弟の縁を割れて、貧乏竹の串に刺され、火宅の火鉢に上せて、親の顔の濫團扇にあふぎ立てられ、不孝の醬油に身をこがし、竹の皮の内に油を取られ、山椒の辛き目を見ること、是一心の持ちやうの悪き故なり。

と諷してある。世の中の味を嘗めて見るのもよいが、遊蕩の爲に廣い世間を自ら狭く暮すのは愚の極である。

### 缺點を鞭打て

廣瀬淡窓嘗て自ら其の身を顧みて、

『予に大病三あり。曰く懶惰、曰く卑怯、曰く鄙吝、三者は同出にして其の名を異にするのみ。若し攻めて其の一を破らば、則ち二者は自ら破れん。』

と告白した。人は其の自惚根性を捨て、自分を直視し、以て我と我が缺點を鞭打つやうでなければ、到底偉い者にはなれぬ。

### 金持と貧乏者の相違

金持と貧乏者との相違は、『餘計なものだ、使つてしまへ。』といふのと、『餘計なものだから貯へて置け。』といふ一點に存する。即ち金に剩餘の出

来た時、之を消費する者は貧乏となり、之を貯蓄する者は遂に富者となる。又貧者は収入を豫想して浪費し、富者は支出を豫想して貯蓄するが故に、貧者が常に當てが外れて困り、富者も亦當てが外れて儲かるのである。

### 好機の正体

或道具屋の店を覗くと、其處にいろ／＼な彫刻物が列べてある。其の中に非常に不思議な形の肖像が一つある。顔は一面毛髪で蔽はれて居り、足には翼がある。あまり奇態なので、試みに其の名を糺すと、

『好機といふ神様です。』

と云ふ。何故かと重ねて問へば、

「顔を隠してゐるのは人間の前に來ても容易に見出す者が無いからである。足に翼のあるのは人間の許に來ても直ちに飛去り、既に一度去つてしまへば再び捕へることが出來ないからである。」と答へた。容易に捉へ難き好機の正體は成程こんなものかと思はれる。

### 財産は上へ漏る

二宮教訓道話に奢侈贅澤を戒めた面白い文句がある。即ち、大凡世の中の物、それ／＼漏る所あり。彼の桶小鉢の如き器物の水は下へ漏り、人の財産は上へ漏り、また据風呂は釜の側より漏りはじめ、人の身代は臺所の鍋釜の邊より漏り出す。

といふ一節が即ちそれである。飲食物にせよ、衣服調度にせよ、其の他一切の奢りは兎角上へ上へと身分を忘れて程度を過して行くものである。人の財産は上へ漏るの一句、實に含蓄が深い。

### 三十一文字の喧嘩

歌人某の隣に仲の悪い夫婦が住んで居た。毎日朝から晩迄喧嘩口論の絶間が無いので、歌人も到底その喧嘩に堪へず、一日隣へ行つて、「明日からは夫婦喧嘩の文句は何でも彼でも三十一文字でいふことにしなさい。さうすれば自と風雅の心も養はれ、随つて悪口雑言も少しは和いて來るに違ひない。」と言つて勧めた上、和歌の作りやらまで教へて遣つた。仲悪夫婦は

それを如何にも尤もな勸告だと思ひ、翌日からは何事の罵言悪口でも必ず三十一文字に綴つて言ひ合ふことに約束した。翌朝目を覺まして互に顔を見るより早く喧嘩が始まる。先づ夫が妻を罵つて、

豆餅のやうな面をばふくらかし

なほ焼餅をやくたいもなき

といへば、妻之を聞いて大いに立腹し、

またしても又悪性を播鉢の

鼻が顔まで味噌をつけるか

と返したので、夫も亦負けぬ氣になつて詠み返した。後隣の歌人から、今後の悪口には四季の心を入れて詠むやうにとの注意があつたので、或日夫

は、

散ればこそいとゞ櫻は目出度けれ

此方の鼻めも早く死なぬか

と浴せかけた。妻は之を聞くと、青筋立て、烈火の如く怒りながら、

ほとしぎす鳴きつる鼻は長生し

阿房親父のあとに残らん

と其の裏をかいてやれば、夫も其儘聞き流しては置くべきかと、今度は

秋が来て顔は紅葉の面にくや

腹が立田の山の神めが

と詠んだ。妻は堪へかねて口をもぐぐさせて居たが、嘗て隣の先生から

「總べて和歌を詠むにはすなほな心を有つことが大切である。苟且にも人を敵とせず、何事も優しく我が身に振返り、仇をも恩で返す心がなくてはならぬ。」と戒められたことを思ひ出し、今こそ大事な時であると直ぐ心を取直して、

寒氣よりはげしくあたる親父めへ

熱燭一ぱい飲ましやりたや

と優しい心を示せば、夫も亦怒り立つ心を解いて莞爾と面相を崩した。其の後、歌人は二人の作歌の進境を賞め、和歌の徳を稱へ、且夫に對しては、堪忍するが家の福德

といふ句を用ひて歌を詠むやうに吩咐け、また妻には、

負けてさへ居れや其の身安心

と下の句を詠むやうに命じた。二人は歌人の命令通り、それぞれ其の文句を下の句に附けて詠んで見たが、双方とも物にならず、随つて喧嘩にもならず、思案に思案した末、先づ夫の方から、

わがよきに嘆の悪しきは無きものぞ

堪忍するが家の福德

と苦吟すれば、妻は上出来々々と手を拍ちて喜びながら、

何事も我をあやまり従ひて

負けてさへ居りや其の身安心

と一首を詠んだ。是より夫婦よく和合し、一家頗る繁榮したといふ美談が

ある。

### 銀製の茶器

破産したる一商人、嘗て嘆じて曰く、

余をして遂に破産せしめたるものは實に妻の持來りし銀製の茶器なり。破鍋に綴蓋の調和するが如く、一切の調度は均衡を保たざれば不自然なり。随つて銀製の茶器は勢其他の日用品をも悉く贅澤ならしめたり。今にして思へば此些事こそ、實に余をして今日の没落を來さしめたるものなれ。

といへり。不經濟極まる贅澤な嫁入道具は大に注意せざるべからず。

### 夫婦和合の秘訣

夫婦の和合は一家繁榮の基である。四十年の間、よく其の夫を助けて、救世軍今日の盛大を致さしめたブース大將夫人が、夫婦和合の秘訣として自戒自守した心得なるものを見るに左の通りである。

- 一、一點の秘密なきこと。
- 二、二つの財布を有たぬこと。
- 三、意見の違ふ時は靜かに熟談すること。
- 四、子供の前では争はぬこと。

此の四箇條は一見誠に平凡なやうで、其の實、何れも夫婦道の核心を成す

ものである。兎角世間には角突き合つて、互に身勝手の振舞をする夫婦、風破の絶えぬ家庭が多いが、夫も妻も此の坦々たる夫婦道に就けば、春風自ら其の顔を吹いて、期せずして必ず和合するであらう。

#### 四休居士

昔、支那の孫肪は自ら四休居士と稱し、萬事に満足してゐた。即ち

鹿茶淡飯飽即休 香の物に茶漬で満足する。

補破遮寒暖即休 破れた着物も寒氣を防ぐに足れば満足する。

三平二満過即休 醜い女を妻にして満足する。

不貪不妬老即休 貪らず妬まず、總べての事に満足する。

#### 美衣美服

或金持が毛織の美しい上衣を着て、さも自慢氣に見せびらかして居ると、哲學者デモナツクスが其の耳許に口を寄せて、

「おい、其の上衣は君の着る前に羊が着て居たものだよ。」

と言つたので、其の金持はあへこべに赤恥を晒した。

また、一日、ヂリア王クレサスが金銀珠玉を鑲めた美服を纏ふて、得意満面、玉座に座し、賢人ソロンに對つて、

「お前はこれほど美しい衣服を見たことがあるか。」

といつて、これ見よと言はぬばかりに外見の美を誇つた。ソロンは心に



其の愚の及ぶべからざるを笑ひながら、

「如何にも見ました。孔雀、鶏、雉子などがそれて而も其の衣服はもつと能く似合つて、王様のよりは遙かに美しい。」

と言つて聞かせた。美衣美服を着飾り着誇つて得意がるやうな者は必ず精神の低劣な人間である。

### 安樂の傳授

安樂に世を渡る最良の方法は、たゞ正直にせよといふことである。有るものを無しといひ、無きものを有るといひ、聞かぬことを聞いたといひ、見ぬものを見たと言ふ嘘を云へば、必ず其處に不安と心配とが起つて来る。其

の不安と心配とこそは實に世渡りの最大の苦しみである。古歌に、  
有体にするが安樂傳授にて

隠すにまさる苦しみはなし

とあるのは、此の道理を咏んだものである。

### 物のあはれ

柳里恭の言に曰く、

年若くして色なければ無骨にして閑雅ならず。老いて色なければ慳貪にして邪見なり。世に色氣といふものは専ら愛敬のつやをかね云ひて、強ち淫慾のみならず。士として色なければ人懐かず、農として色

なければ物育たず、工として色なければ巧なく、商として色なければ人間はず。天地の間、色なくしては何物も立ち難し。と。されば古歌に、

戀せずば人は心のなからまし

物のあはれもこれよりぞ知る

と道破したるにあらずや。

### 色慾を制せ

中江藤樹、或人より色慾に打勝つ方法を問はれた時、

色慾に心を奪はれるのは未だ大志が確立しないからである。色慾を

制するのが苦しいか、色慾に味まされた後の祟りが苦しいか、よくよく對算して見るがよい。

と答へた。血氣未だ定らぬ青年男女の味ふべき言である。

### 今日の一時間

人生は過去と未來の永遠に挟まれた瞬間であつて、一刻と雖も猶豫を許さないものである。毎日其の日限りの積りで、其の務めを盡さなければ、哀れまた今日も夕となりけり

明日とは待たぬ命ながらに

といへる行生法法の歌の如く、一生の何物たるかを知らざる中に早くも

既に其の半生を過してしまふ。今年花落ち顔色改まる、明年花開いて復誰か在らん。今日の後今日なきを知らば、断じて時間を無益に浪費する勿れ。シヨウの言に曰く、

人は總べて生命の短きを啣つと雖も、無用に浪費したる時間は有益に用ひたる時間よりも多し。

と。智慧ある人は取返しのかぬ時間の損失を最も悲しむ者である。フランクリンは、

汝は生命を愛するか、然らば時間を浪費する勿れ。時間は生命を造る元素なればなり。

と戒め、更にスマイルスは、

時間は人をして才徳を涵養し、品行を方正ならしむ。

と言へるは、恰かもフランクリンの箴言を敷衍したものであつて、何れも敬聴に値する。その他、時間に關する格言の卑近なものを擧げると、

今日爲さざる事は明日も爲されず。(ゲーテ)

今日の一時間は明日の二時間よりも貴し。(西諺)

能く事を勉むる者は一日を以て十日となす。(貝原益軒)

時間は萬事を定む。(バイロン)

### 彌次郎兵衛式處世法

十返舎一九の書いた彌次郎兵衛、喜多八道中膝栗毛の一節に、彌次郎兵

衛と駕籠昇の對話を載せてあるが、其の中に巧に隠してある處世上の活教訓こそは之を味讀すれば、實に無限の面白味がある。即ち駕籠昇の荒くれ男が彌次郎兵衛に對つて、

「篤行かまいか。是から二里半の長丁場だ。安う召さぬかい。」

と言へば、世渡の懸引に妙を得た彌次郎兵衛はぬからぬ顔で、

「安くは厭だ、高くなら乗りやせう。」

と高飛車に答へて先づ駕籠を喜ばせる。駕籠は圖に乗つて、

「そうしたら高うして三百頂きませうかな。」

「いやだ、く。も少し高くやらぬいか。」

「ハア、未だ安いなら三百五十で……。」

「一貫五百ばかりなら乗つてやらうか。」

「エ、滅相な。私共も稼業冥利、そないに澤山は頂かれませぬ。せめて五百で召して下せんかい。」

「それでも安いから厭だ。」

「ナニ、安いことはあるまい、そしたら七百下んせ。」

「イヤ、面倒だ。何かなしに一貫五百よりまからぬ、く。」

「ハテサテ、困つたもんぢや。夫よりちつとも負らないか。」

「まからぬ、く。」

「エ、何の事ぢや、駕籠の方から値切るといふは珍らしい。ヤ、棒組一貫五百でやらまいか。サア、旦那召しませえ。」

「それではいゝか。高く乗つてやる代りに酒手を此方へ貫はにやならぬが合點か。」

「上げますとも……………」

「そんなら先へ行つて一貫四百五十此方へ酒手を引いて、残り五十の駕賃だが、それて承知か。」

「エ、そんな事であらう、途方もない。」

「そこで厭なら先づ縁切りぢや、ハアハア……………」

と彌次郎兵衛が甲高に笑へば、相手の駕昇きは呆氣に取られて怒るにも怒られず、と言つて無理に勸めると、とんでもない馬鹿を見るので、自然と話が立消えならざるを得ぬ。相談事や掛合事や其の他人事の一切は總べて

此の呼吸で行れば、即ち笑顔で迎へて笑顔で退けると、世の中は何事も丸くいくものである。

### 多辯の戒め

哲人ゼノ、嘗て或多辯な青年を戒めて、

「神は人に一枚の舌と二個の耳を與へた。故に我々は話すことの二倍だけ人から聞かねばならぬ。」

と云つて聞かせた。他人の言葉に耳も傾けず、事毎に出娑婆つて喋々する者には誠によい教訓である。

### 衛生の大道

人の此の世に處するや、貴賤貧富の別なく、皆それづくに本務を有つてゐる。随つて其の本務を盡すべき本體たる身心の健全を圖ることは最も大なる道徳であらねばならぬ。誰やらの句に、

磯までは海女も簑着る時雨かな

といふのがある。磯へ出れば直ぐ海水に浸つて濡れ鼠のやうになる海女でさへ、其の道中には時雨をすら厭ひ避けるといふ、此の平凡な心こそ飲食座臥其の他萬事に應用すべき衛生の大道であるまいか。

### 禁酒の癩

非常に酒好きな或人が禁酒して數箇月程經つと、以前の飲友達が訪ねて來

て、

「おい、君。禁酒して何か變つた事があるか。」

と冷笑す。

「いや、別にこれぞと云ふ大した變りもないが、其の後右の脇腹に瘤が出て、また左の脇腹にも出るかも知れない。」

と答へると、飲友達は此處ぞと許り膝を乗り出しながら、

「それ見た事か、俺が云はぬ事ぢやない。三度の飯よりも好きな酒をやめて、何んか變りが無くてたまるものか。瘦我慢を止して、今日は俺と一緒に何處かで飲め。長く禁酒して居ると、生命も危いぞ。」

といふ。禁酒者は黙つて聞いてゐたが、やがて、

「折角の親切は誠に有り難いが、其の瘤は別に厄介なものでもなければ、生命に障る程のものでもないから、此の後も益々禁酒を續けて其の瘤を大きくもし、數をも殖すつもりだ。昔の飲友達の好みを以て一つ其の瘤を見せてやらう、よく見て置きたまへ。」

と、懐中かな大さきら財袋を取出して、  
「禁酒の瘤はこれだ。」  
と見せつけたといふことである。

### 苦しませの信仰

米國の醫師某の談話に

「私の手に掛けた患者の中で到底全癒の見込なく、其の危篤に際し、未來の冥福を禱るため特に病床に於て洗禮を受けた者が幾百人あるか知れない。然るに其の後、幸にも九死に一生を得た者が百人程あるが、其の中たゞ僅かに三人を除けば、即ち残りの九十七人は肉體の平癒と共に悉く信仰を捨て、しまつた。」

と言つてゐる。如何に苦しい時の神頼みとはいへ、淺ましきは實に人の心である。古い道歌に、

死ぬるのみ一大事とは人はたゞ

生くる間ぞ一大事なる

とあるが、眞の信仰は此の心より生ずる。

座右の銘

或農學士の座右の銘として傳へられてゐるものに、斯麼のがある。曰く、

一分の善は九分の惡に勝つ。

二分の借は八分の貸より恐るべし。

三分の堪忍は七分の得あり。

四分々々しては何事も成らず。

五分々々の智慧を十分に使へ。

六分の正直に擔保は要らず。

七分の暮しに不足なし。

八分の腹に醫者要らず。

九分にて足れば間違なし。

十分の働きには貧乏追付かず。

と、面白い有益な教訓が含まれてある。

誘惑の力

昔、雅典にセオドタスといふ賣笑婦があつた。或日、ソクラテスに對つて、

「私は先生の弟子を誘惑することは何でもありません。」

と擲擧つた。ソクラテス之に對へて、

「それは當然だ。私は弟子を導いて、世人の未だ知らない徳の峻坂を登らせようとしてゐるのに、お前は下り坂に居て之を邪道に誘惑する



のであるから。」

と言つた。學問は坂に車を押す如し、油断をすれば後に戻る位ですむ。が、誘惑の力は人間を墮落させずにおかない。

### 金の逃出す聲

大村益次郎が伏見に塾を開いて門下生を致へてゐた時の事である。門下生の中には、こつそり酒樓に上つて折花攀柳の酔興に耽る者があつたのみならず、近傍にある青樓の絃歌が神聖な講義の席までよく聞えて來て、どうも若い者は自然と浮れ氣味になり易かつた。一夜、何時もの通り講義してゐると、三絃歌舞の聲が盛に起つて、それと

なく門下生を誘惑するやうに聞える。乃で、益次郎は一同を顧みてわざと

「あれは何の聲ぢや。」

と問ひ掛けた。

「三味線の音です。」

斯う一人が答へると、

「イヤ、あれは金が逃げて行く聲ぢや。」

と云つた。門下生其の一言に翻然として悟る所あり、其の後登樓する者が一人も無くなつた。盲龍軒月安の狂歌に、

春まださ室の梅が枝だまされて

開きかけたる紙入の口

と諷してあるが、青春時代は兎角情慾に迷はされ易いから、志操を堅固に持つことが肝要である。

### 長生きに術なし

夢窓國師の書かれたものに、

「人は長生せんと思はゞ、嘘を云ふべからず。嘘は心をつかひて、少しの事にも心氣を勞するものなり。人は心氣だに勞せざれば、命長きこと疑ふべからず。」

とあり。鐵樗仙人の贊に、

仙人は不養生せず腹立てず

物ほしからずそれで長生き

と歌へり。長生に術なし。唯此の教に従へば可なり。

### 産兒制限の一理由

戀は盲目である。併し生殖も亦盲目である。徳川時代に唄はれた俗謡に、

油高いとて宵から寝たら

油高いのに子が出来た

といふのがある。併しハックスレーの書いた物には更に大なる皮肉が宿つてゐて、これを讀むと、人間の行爲は如何にも盲目である、馬鹿らしいと云ふ感じを禁じ得ない。即ち、

神は天地創造の初め「殖せよ、増せよ」と人間に命じ給ふた。人間は神の他の教には少しも従はないが、此の生殖のことだけは心から忠實に神命を守つてゐる。そして生存競争の爲には神命に背いて種々の罪惡を平氣で犯しながら、一方に於ては此の生殖に依つて益々生存競争を激しくしてゐる。

ど。これでは新マルサス主義の高唱宣傳にも矢張り理窟はある。

### 懷中鏡

佐久間象山はいつも鏡を懷にして居た。偶々他人が嘘偽りを言へば、「あゝさうか。」

と先づ軽く聞き流して置いて、直ぐ其の後から、

「君、これで其の顔を見るがいゝ。」

と、徐ろに懷中から鏡を取り出して其の人に渡すのであつた。古歌に、心をば鏡にうつすものならば

さぞや姿の醜かるらん

とあるが、我と我が心の姿を顧みたら、間違つたことは出来まい。

### 理窟と道理

諺に無理が通れば道理が引込むといふことがある。無理は理窟がましい所に嫌味があり、道理は人情に合つてゐる所に温味があるもので、彼と

此とは頗る似て非なるものである。梅園叢書に曰く、

理窟と道理と隔てあり。理窟はよきものにあらず。例へば親が羊を盗みたるは悪しきなり。親にもあれ悪しきは悪しき事なれば、直ぐに訴ふべきなりと云ふは理窟なり。親が羊を盗みしは悪しき事ながら、子として親の悪事を云ふべき様なしとて隠すは道理なり。人死して再び返らず、返るべき道あらば嘆いても嘆くべし、返らぬ道なれば嘆きて益なしと云ふは理窟なり。人死して再び返らず、返るべき道あらば嘆かずともあるべけれど、返らぬ道なればこそ悲しと嘆くは道理なり。と説いてある。世の中をたゞ一片の理窟で押通さうとする者は大いに此の道理を反省するがよい。

### 共勞共存の男女

共勞共存、偕苦偕樂は夫婦の大道であらねばならぬ。此の心の光りにして常に曇らぬならば、たとひ女の身とはいへ、夫の困厄に際しては勇氣自ら百倍するを禁じ得まい、これ即ち女の張りである。昔の都々逸に、

丁と張らんせ若し半出たら

わたし賣らんせ吉原へ

といふのがある。これ博徒の親分の女房氣質を歌つたものであらうが、萬一の場合に際しては其の夫と辛苦を共にするといふ心意氣が言外に横溢して、頗る強味がある。尤も一家の主たる男子として其の妻の後押しを頼みに

するやうな氣の弱いことでは困るが、生活難の日々に激加する世の中ゆゑ、人の妻女たる者は少くも内助の功を立て、ほしいと思ふ。女は何時も男に寄生して行くものと言つたやうな、舊い思想は宜しく一掃せねばならぬ。

### 金錢の爲の結婚と戀愛の爲の結婚

急いで結婚するは後悔の基、秘密に結婚すれば公然に辱しめらるとは英獨佛伊蘭の諸國を通じた諺である。又ジョンソン嘗て未婚者を戒めて曰く、金錢の爲に結婚する人より悪しきはなく、戀愛の爲に結婚する人より愚なるはなし。

と言つた。然り、獨逸では、

戀愛の爲にする結婚は樂しみの夜あれども、悲しき晝あり。

といひ、又、

金錢の爲にする結婚は、己の自由を賣るものなり。

と云ふてあるではないか。

### 花中の鶯囀

實訓文彙に、

人、悪人と交るべからず。物に浸漬するは天地の理、善人と交れば亦自ら氣象を變ず。花中の鶯囀、其の聲、花ならざるも亦芳し。

といへるが如く、朋友は先づ擇んで後交るべきものなり。されど、樂翁が

其の著花月草紙に、

たゞ其の所長を友とすれば交り難き人もなし。我に益なき友もあらずと云へる態度も亦必要なるべし。

### 辰角の頓悟

不角は不卜の門人で、俳諧の功に依つて法眼の位を授けられた人である。其の三男に辰角といふ者あり、縁ありて麻布飯倉の小川屋平八の婿養子となつたが、平八夫婦の氣むづかしさに辛抱が出来ず、遂に親の許に歸つて來た。不角、辰角を呼び、今一度飯倉に歸りて辛抱して見よとて、いぶせくも後は寢易き蚊遣かな

と、一句を認めて其の不心得を諷した。辰角も其の意を悟り、再び飯倉へ歸るや、心を盡して平八夫婦に孝行したので、一家和樂して家業も亦繁昌したといふ。

### 峨山禪師の法衣

嵯峨天龍寺の峨山禪師が寺院再建の勸化帳を持つて某家へ行つた。然るに其の家の主人が禪師の法衣の餘りに粗末なのを見て、氣の毒に思ひ、

『本堂再建の寄附も致しますが、その前に先づ貴僧へ法衣を寄進しませう。』

と言つた。峨山禪師は眞面目になつて、

「それは誠に有難い。併し峨山が着る程の法衣を拵へて下されるか。」  
といへば、主人は、

「どの位で新調へられませう。」  
と訊ねる。

「さうさ、四五萬圓はかゝらう。」

との返事に、主人は吃驚して、

「そんな高い法衣がありますか。」

との質問である。

「有るとも、現に今、俺の所で大工や人足が頻りに裁縫してゐるのを  
知らないか。」

と念を押せば、

「あれは本堂ぢやありませんか。」

といふ。

「うむ、その本堂こそ峨山の法衣ぢや。」

と答へて、呵々と打ち笑つたが、主人は其の度量に吞まれて愈々渴仰した  
といふ。世には此の主人の如く自分の心を尺度にして、直ぐ他人の心中を  
忖度する人が少くない。併しそれは取越苦勞に終るか、乃至は對手の感情  
を害するに過ぎないものである。

貸せとは返す心か

徳川家康の旗本に矢田作十郎といふ武勇の士が居つた。一日、其の友阿部四郎五郎といふ者が矢田に對つて、

「おい、矢田。君の冑の鯉の立物は實に立派なものぢや。俺に貸して呉れ。俺はあれを着けて此度の戦争に一働きしようと思ふ。」

といへば、矢田は非常に怒つて、

「腰抜け奴。さういふ腰抜けには此の冑を貸すことは相成らぬ。」

と一言の下に拒絶した。阿部は自分の依頼を快く聞き入れられず、剩さへ腰抜けとまで罵倒されたので大いに立腹し、

「貸すことならずば貸さぬと言ひへばそれによい。然るに事もあらうに、腰抜けとは何だ。此の馬鹿野郎。」

と賣言葉に買言葉が募り合つて来る。矢田は怒氣を抑へて、

「よく聞け、阿部。此の冑を出陣の贖に呉れよといふのなら、俺も男ぢや、喜んで遣りもする。然るに貸せとは何事だ。借りるのは、やがて返す心であらう。して見れば、君は一旦戦場に出ても生きて歸るつもりだらう。矢田は此の冑を着けて戦場に出る時は再び生きて還る心はない。俺が君を腰抜けと垢罵る仔細は其處にある。」

と言つたので、阿部も流石の武士であるから、忽ち其の非を悟つて謝罪したといふ。漸が醇堂漫筆に出てゐる。泰平無事の世とはいへ、何事を爲すにも戦場に出る武士の生きて再び還らぬ覺悟が緊要である。また近世叢話に上杉謙信の言葉を録して、



何時も敵を掌中に入れて合戦すべし。傷く事なし。死なんと思へば生き、生きんと戦へば必ず死ぬるものなり。家を出づる時より歸らじと思へば歸り、歸るべしと思へば歸らぬものなり。世の中は不定とのみ思はるべしと雖も、武士たる道は不定と思ふべからず。とらへるは味ふべき箴言である。

### 良寛の三嫌

越後の良寛和尚の詩歌や書は此頃になつて何れも世人の注目を惹き好尚を博せんとしてゐるが、和尚自らは嘗て、

余に三嫌あり。料理屋の料理、歌詠みの歌（又は詩人の詩）及び書家の書

即ち是なり。

と言はれてゐるが、技工を弄したのものには何處かに嫌味があつて面白くない。詩歌や書畫はたとひ稚拙であつても、天真爛漫な素直なものがいい。

### 神に返れ

孔子嘗て「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり。」と言つたが、これ有限を無限に化する死の意義の註脚と見てもよい。死の意義を解する者は常に遠神念を去つて求神念を養ひ、己を空しうして以て天地の心に同化しようとなつてゐる。ラビ、エリエゼル嘗て其の弟子に教へて、

「お前は其の死する一日前に神に返れ。」

とらへば、弟子は、

「それなら如何して死の日を豫知しませうか。」

と反問した。ラビ、エリエゼル之に答へて、

「今日、神に返れ。お前は、或は明日死ぬかも知れない。それゆゑ、毎日其の日其の日を神に返るの日としたならば、其の行爲は清純に而も無限の向上を見るであらう。」

と説いた。人生、死を解するは實に無上の修養であると言はねばならぬ。

### 女と道

婦女嘉言に曰く、

男子にして女に遠ざかる心あらば、其の人は必ず道を得ることの近きなりと知るべし。

とあり。女に近寄りたがる者は多けれども、女に遠ざかる者は今も昔の如く尠しと見ゆ。

### 假りの世

諸法の實相は不生不滅、不垢不淨、不増不減である。然るに世人動もすれば現世を以て夢幻なりと観ずるけれども、其の夢幻なる現世、空華たる人生の外には斷じて淨土があり得ないことを思へ。古歌に、

假の世を假りの世ぢやとてあだにすな

假りの世ばかり己が世なれば  
とあるのは、即ち人生即成佛の意である。

使ふ人と使はるゝ人

フランクリン嘗て曰く、

『自分の氣に入る忠實な召使が欲しくば自分で自分の召使になれ。』  
と。世には自ら己を欺く偽善者さへあれど、兎角己を信ずるより確かな事はなしと知るべし。

然るに備前老人物語に、

『大も小も人を使ふには人を使ふと思ふべからず。人に使はるゝと心得

得て能く教へ能く堪忍すべし。』

といへるは、フランクリンの金言に似たれども、其の意義儘に勝りて深長なり。人を使ふ者に此の宏量なくば逆も人を使へまじ。又立場を換へて、『人に使はるゝには人に使はるゝと思ふべからず。人を使ふと心得て萬事に手抜かりあるべからず。』

と云ふも面白し。人に使はるゝ者に亦此の氣概なくば物の役に立つまじ。

人生は芝居の如し

福澤諭吉翁嘗て人生を論じて、

人生は芝居の如し。上手な俳優が乞食になることもあれば、大根俳優

が殿様になることもある。とかく、餘り人生を重く見ず、捨身になつて、何事も一心にすべし。と言つてある。

### 學び易き偉人の惡徳

アレキサンダー大王は大酒を好み、また怒り易い惡癖を有つてゐた。けれども、其の半面には潔白卒直、公正寛大の美德を有し、部下に對しても敵に對しても常に依怙最負がなかつた。然るに人は其の美德を倣はず、其の惡癖を見習ふ者が多かつた。

諺に「人の振り見て我が振り直せ。」と戒めてあるが、修養上此の平凡な

一語の尊さを知らぬ者は猶偉人の惡徳を學ぶ者であるまいか。

### 未練を残すな

後漢の郭林宗が何かの用事で街に出た時、其の前を行く一人の男が甕を路上に落してざくりと破つてしまつた。けれども、其の男はそれを振向きもせず、さつさと歩いて行くので、郭林宗は足を早めて其の後から、

「君は甕を落して毀しながら、何せそれを振向いても見ないのか。」

と訊けば、其の男は、

「未練がましく振向いて見たとて、一旦破れた甕は直るものでないぢやないか。」

と答へたので、大いに感服したといふ話が文章規範に載せてある。何事につけても、返らぬ事をよくして、いつまでも未練を残してゐるのは愚である。早く見切りを付けるものは付け、諦むべき事は速かに諦めて、直ちに更に一步前へ踏出すことが急務である。

### 心の鏡

蕉齋筆記といふ本に、

「君子は物を以て物を見る、己に等しからんことを欲せず。故に普くして偏らず。小人は我を以て物を見る、己に等しからんことを欲す。故に偏りて普からず。」

と。また王陽明の言に、

「目に體なし、萬物の色を以て體とす。耳に體なし、萬物の聲を以て體とす。鼻に體なし、萬物の臭を以て體とす。口に體なし、萬物の味を以て體とす。心に體なし、天地萬物の感を以て體とす。」

とあり。又古人の歌に、

わたくしを離れて見れば心ほど

あかるき鏡世になかりけり

と言へるは、蓋し此の同意語と見て可ならんか。

慾は人間の勁敵

新論に曰く、

林の性は静、動く所以のものは、風、之を揺かすなり。水の性は清、濁る所以のものは、土、之を渾すなり。人の性は貞、邪なる所以のものは、慾、之を眩はすなり。

とあり。實に慾は人間の勁敵、唯これに打勝つ者のみ人間の眞面目を發揮し得べし。

### 最も簡単な強壯法

支那の吳廷芳は非常に身體が丈夫で百二歳まで長生した。或人、其の無病強健長壽の秘法を尋ねると、彼は先づ其の人を自分の寢室に案内し、寢

臺の上に懸けてある扁額を指しながら、

『私は毎朝起きると、直ぐ此の扁額を見て其の日を愉快に暮すやうにしてゐる。私の長壽法は此の外に何もない。』

と答へた。但し其の扁額には、

余は青年である。

余は強健である。

余は快活である。

と書いてあつた。

あし刈り小舟

梟は猫鳥ともいひて、其の聲が悪い。或日、鳩が何處かへ行く途中、反對の方向へ飛んで來る梟に出會ひ、

「何處へ往くのか、そんなに急いで。」

といへば、梟は、

「里がへするんだ、もつと東の方へ。」

と云ふ。鳩は不思議に思つて、其の理由を聞くと、

「此の邊の人は俺の鳴く聲を聞いて皆厭がつて居るから、東の方へ住家を變へようと思ふのだ。」

と梟が打明けて語つた。乃て鳩は、

「君、それは間違つてゐる。人に嫌はれる其の聲をかへなくては、た

とひ東へ移らうと、何處へ行かうと、矢張り厭がられ悪まれるに極つてゐる。それよりは其の鳴く聲をかへる。」

と直言して聞かせたといふ寓話がある。處世の道も亦是同じである。人に嫌はるゝ心を直さなければ、たとひ幾ら手をかへ品をかへても所詮其の效がない。堀田正敦此の心を歌つて、

難波江のあし刈り小舟あしからは

はや漕きもどせもとの渚へ

と詠んである。

自ら持め

凡そ世に立つ程の者は、何なりと自ら恃む所がなければならぬ。何處迄も一本立ちて遣つて行ける自信があれば、敢て上級の者の願使に甘んじて居なくとも濟む。俗諺に、

嫌て幸ひ好かれちや困る

お氣の毒だが外にある

と唄つてあるが、之を單に男女關係上の負惜しみとのみ思つてはならぬ。官公吏、社員、教員其の他何職たるを問はず、其の上級者に對して『嫌て幸』と言ひ放つだけの意氣と、『お氣の毒だが外にある』と言ひ切るだけ眞の立場を得て居る人が幾何あらうか。五斗米の爲に膝を屈して、何事も御無理御尤もと頭を下げて居るのは、或は當世向きの八方美人主義處世術かも知れぬが、それでは男の一分が立つまい。

### 山本勘助の遺訓

武將山本勘助の遺訓に、

朝夕とも食事に向つて心得あり。何程富貴なりとも、料理の精麩、鹽梅の濃淡、心に叶はざるとも憤つて食ふまじ。心中に天道へ御禮申上げ、心を眞に持ちしたしむべし。人と生るゝより、一人毎に食事を充て行ふ。これ天祿と言はずや。この心なくて奢に任せて美味を好む人は、初め福ある身も終に貧乏するは天道の照覽に背くが故なり。とある。一事が萬事、單に食事に關する箴言としての美味ふべき言では



なり。

嫉妬の手加減

西洋の俚諺に

己の妻に疑惑を抱く夫は、萬人に對して彼女は放埒なりと思惟する權利を與ふ。

といふことがある。昔、或男、旅中より其の妻に與へて、

靡くなよ手馴れし庭の絲芒

いかなる風の便りあるとも

と詠んで送つた。處が、其の妻、之に答へて、

風もなし靡かぬものを絲芒君をおもへば心みだるゝ

と返したとやら。嫉妬は疑惑の基であり、不和の源であるにもせよ、夫婦の仲に多少嫉妬の情のないのは餘りに無氣味である。併し、

焼餅は遠火で焼けば焼く人の胸も焦さず味はひもよし

といふ歌もある通り、嫉妬の手加減は實に至難である。

怒るな

精神の修養を積まうと思へば、其の機會は毎日幾らもあるが、大抵の人はそれに氣付かずに過してゐる。犯罪學者として有名な小河滋次郎博士が學校を出たての頃、錢湯に行つて、流しに悠然と坐り込んで洗つて居ると、

煮えるやうな熱い湯を背中へざアと浴せた者がある。博士は非常に怒つて其處に有合す洗桶を握るや否や、其の奴をぶん撲らうとした。處が、それは末だ頑是ない六歳ばかりの子供である。博士は思はず、其の手を引込めて考へた、「若し此の桶で子供を撲り殺したら、自分の罪は怎うなるか、まづまづ撲らなくて可かつた」と、自ら悦んだが、心が咎めてならぬ。手こそ下さないが心では其の子供を撲つたも同じことである。併し誰が此の憎悪の念を罰するのかと我と我が心を省みて、もう是からは怒るまい、怒らねば自分の罪だけは作らずに済むと、斯様に反省されたとの話である。獨逸の諺に、

「憤怒の最後の瞬間は後悔の最初の瞬間である。」

とあるが、兎角、心頭に怒を發することは慎しまねばならぬ。人格の修養に志す者は此の心を以て日常茶飯の事にも反省の機會を求めねばならぬ。

### 歸る故郷

閑通和尚の座右の銘に、

父母に呼ばれて假りに客に来て心残さず歸るふるさと

とある。古語にも、亦死を見ることが歸するが如しとあるが、死に對して恐れざるもの果して幾人かある。

### 修養の力

賣卜者あり、一日、ソクラテスの人相を卜して、

「彼は總べての悪徳を具へてゐる。」

と言つた。ソクラテス、此の言を聞くや、其の弟子に告げて、

「然り、我は總べての悪徳を有つてゐる。されど之を行爲にあらはさ  
ざるはたゞ修養の力である。」

と言つた。

### 幸福の日

獨逸の鐵血宰相ビスマーク嘗て其の友に曰つて、

「私の名聲天下に高いことは私自身もよく知つてゐる。けれども、此

の大なる名聲を有する身でありながら、眞に自ら幸福であると感じた

ことは一生の中僅かに二十四時間だけである。」

と哀語し、又詩人バイロンは其の過去を振り返つて、

「生涯を通じて幸福の日を數へて見たが、僅かに十一日のみである。」  
と嗟嘆してゐる。

カリフ、アペデルラーマンは其の死に臨みて、

「私は五十年間天位にあつて、地上の有らゆる榮華を盡し、凡そ造物  
主が人間に許した歡樂は悉く之を満してゐる。それで世人は私の生  
涯を幸福の連鎖であると思つて居ようが、今遡つて生涯を顧みるに、  
私自身が自分を幸福だと感じた日は、驚く勿れ、只の十四日に過ぎな

と告白し、文豪ゲーテも亦同じく、

『七十五年の生涯の中、僅かに四週間の幸福だもなかつた。ただ谷底から山頂まで石を運ぶ事を繰返したのみである。』

とて、それとなく人生の苦勞と憂愁と悲哀をほのめかしてゐる。併し人生は未だ幕の明かない芝居のやうなもので、何人でも其の將來に如何なる喜劇が起り悲劇が生ずるかを豫知することが出来ない。其の豫知し難い前途に光明が横たはつて居ると思へば、敢て人生を悲觀するにも及ぶまい。

### 孤雁の畫賛

明治維新の頃、安藝の國三原町附近の濟法寺に物外和尚とて、名高き禪僧があつた。膂力絶倫、其の拳骨を以て打てば如何なる板も必ず凹んだので世人綽名して拳骨和尚と呼んで居た。

一日、三原の城主が畫工某に雁を描けと命せられた。畫工は君命を畏み、やがて孤雁を畫いて、恭しく奉つた。城主之を見て大いに氣持を悪くし、

「雁は常に群り飛ぶものであるのに、孤雁とは不吉千萬である。是或は天下の將に亂れる前兆であらう。」

と言へば、近臣の者、亦一人として之を慰めることが出来なかつた。偶々拳骨和尚が其處へ來合せて其の理由を聞くや、

「然らば其の不吉な畫を祝うて上げよう。」

と早速筆を執つて、

初雁やまた後からも後からも

と賛した。城主此の畫賛を見て大きに満足したといふことである。  
その後、誰やらが、

一雁呼友爲三兩雁

三雁四雁五六雁

飛去飛來無限雁

雁雁雁雁雁雁雁

と七言絶句の一詩を賦したと言ふことである。

女心

ある亭主が、

『女が何時も新しい、美しい衣服を着たがるのは何の爲だらう。おめかしすれば男が嬉しがると思ふのか知ら。』

といへば、其の女房は、

『それは男の心を喜ばせる爲ではなくて、他の女に羨まされたいからです。』

と答へた。これ蓋し偽らざる女心の淺慕さを示すものか。

善悪是非の判断

昔、虚無僧と塗師屋と和尚の三人が偶然某處で出會ひ、四方山の話の末、各々其の所見を陳べることになつた。乃て虚無僧が、

尺八の竹に異りはなけれども

一つは穴のくりやうによる

と眞先に詠んで得意がる。塗師屋も負けては居ず、直ぐ其の後から、輪島なる漆に異りはなけれども

一つは質のくりやうによる

と讀み返したので、和尚も亦黙つて居られず、

極樂の道にかはりはなけれども

一つは珠數の繰りやうによる

と一轉語を下したといふ話がある。人の善惡、事の是非は一心にあり、形貴くして心賤しきは其の人實は賤しいのである。

### 戀と徳との追分道

遠くて近きは男女の道とやらにて、こは迷ひ易き人生の行路なり。或書に

男も女も生れて十五里ばかり歩み來ると、迷の巷といふ追分道あり。

右の方は戀の道と云ひて、人の行きたがる道なれども、其の行當りに大損の門あり。左の方は大學の道とて、暫くの間は歩み難く、面白からぬ道なれども其の奥には徳に入るの門あり。必ず左の方へ赴くべし。路草をせずして行けば長者が里へも、寶の山へも行かれ、天までも登るほどの道なればなり。

とあり。實に名言なり。然れども性の教育を施さずして、無闇に徳に入る

門に向つて駆け入らしめんとすることは考へものなり。

### 謡曲の三病

謡ひの名人観世左近、常に人に語りて曰く、

『謡曲に三病あり、聲のよきと、記憶のよきと、拍子のよきと、此の

三事備はれる者は大抵謡にならずして止む。』

と。自惚る者は必ず慢心し、慢心する者は必ず上達せざること、豈獨り謡曲のみに限らんや。

### 人生の見方

人生の目的は快樂であるべきよりも、寧ろ苦痛であると考へるのが眞理に近い。シヨペンハウエル嘗て、

吾々の陥り易い多くの誤謬の中で、其の最も大なるものは『幸福なるべき爲に此の世に生れて來た』と考へることである。

と言つたが、これも人生の見方の一つである。また、

人生の不幸艱難を慰める最良の方法は、自分よりも一層苦しい境遇に沈淪してゐる他人の身の上を考へることである。

と言つた。吾々は正しい人生觀に基づいて奮闘すれば、如何に運命の魔の手が其の前途を遮るとも必ずや其處に希望の光りが輝く。何事も運命と諦めよ、暗黒、死に向つて萎縮することは人生の目的を貫く所以ではない。

大事に處する態度

加賀の儒醫服部元好、或時火事に逢うて其の家を焼拂はれたことがある。時に、或人、其の門に、

お醫者さま家の黒焼何になる

と擲擲半分に張札した。元好、之を見て莞爾と笑ひながら、其の傍に

日雇大工の腹藥なり

と書付けたといふ逸話がある。大事に際會して泰然自若洒々落落たる此の態度、學んで心の糧とすべし。

出過ぎるな

文政の頃、御賄六尺に高橋小十郎といふ者あり。其の末期、倅富五郎に一首の歌を與へ、

物事はひかへてしやれ出過ぎるな

引くに引かれぬ義理と浮世ぢや

と誡めたる由、やさし草に見ゆ。義理に絡まるゝも辛けれど、出る杭は打たれ易きことも亦考ふべきなり。

飲食の戒め



柳澤淇園の著に雲萍雜誌といふ書あり。其の中に、

酒、數献に至る時は味ひなく、肴、數種に及ぶ時は美みなく、煙草、數服に及ぶ時は苦味を生じ、茶、數碗に及ぶ時は香しからず。乏しかりし時を忘れて食好み

このみの多き秋の山猿

とあり。美味飽食は今人の通弊、味ふべき言ならずや。

### 臨終の袋

或人、親しく蓮如上人の教を受けようと思つて、東本願寺に到り、其の門を叩いた。上人出でて其の人に面接するや、

「お前は今日袋を忘れて来たから、たとひ教を説いても無益である。」  
と、一言の下に拒んだ。其の人、大いに之を怪みて、

「其の袋とはどんな袋で御座いますか。」

と質した。上人答へて、

「臨終の袋ぢや。眞面目にならなければ、如何なる教を聞いても無益な事ぢや。」

と言ひ放つた。然り眞剣な態度は何事にも必要な條件である。

### 前世と後世

沙石集といふ本に、

「前世坊といふ僧あり。この僧苦しみにあひても前世の事をいひて憂  
ひず、楽しみにあひても前世の事をいひて喜ばず。」

といふ一節あり。また發心集にも亦之に類する咄を載せたり。即ち

『ましての翁、苦しみにあへば、現世の苦さへ斯くばかりなれば、ま  
して地獄の苦しみは如何ばかりぞと云ひ、世の楽しみを見ては現世の  
楽しみさへ斯くばかりなれば、まして極樂の楽しみは如何ばかりぞと  
只管に未來の淨土を慕へり。』

とあり。人の一生は其の過現未共に因果の理法に支配せらるゝものにして  
善因善果、惡因惡果は所詮免れ得ずと觀念すべし。故に未來の福祉を望ま  
ば現在常に善因を作ること必要にして、又現在悲境に在る者は過去の惡因

に依ると諦め、只管に修養努力すべし。

### 辭世のさまぐ

元祿七年十月、芭蕉が奈良の行脚を終つて大阪に歸り、御堂前花屋二左衛  
門方にて養生中、其の病篤きに及び、門人等擧りて辭世を乞ふた。芭蕉之  
に答へて、

昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、我が生涯に云ひ  
捨てたる句は、一句として辭世ならざるはなし。若し我が辭世を問ふ  
人あらば、此の年頃云ひ捨てたる句、何れなりとも示し給はれかし。

と言つたが、平生此の覺悟と用意とがあるならば、死に際して辭世などを

詠む必要はない。併し國學者井上文雄が其の死際に、

老いはて、命惜しとは思はねど

死ぬとおもへば悲しかりけり

と、自らなる一首を詠んだ心には偽らぬ真情が現れてゐるやうに、總べて辭世には其の人の心の有りの儘なる姿が見出されて面白い。談林の鼻祖西山宗因は其の辭世に、

宗因はどちらへと人の問ふたなら

ちと用ありてあの世へと云へ

と残して洒々落落、小西來山は、

來山は生れた料で死ぬるなり

これで恨みも何も彼もなし

と因果の理を示し、高松城主清水宗治は、

我が體消ゆるといかに思ふべき

空より來り空へ歸れば

とて永生の道を歌ひ、また十返舎一九は戯作者だけあつて、其の辭世も亦

此の世をばどりやお暇にせん香の

煙と共にはい左様なら

と茶化してゐる。最明寺時頼は夙に參禪悟道した爲か、

業鏡高懸 三十七年 一槌打碎 大道坦然

と一偈を打して此の世を終り、雲水かしく坊といふ狂歌師は、

富士の雪とけては元の墨衣

かしくは筆の終りなりけり

との一首を残りし、花月草紙の著者白河城 主松 平樂翁は、

今はたゞ何を思はん憂き事も

樂しき事も見果てつる身ぞ

とて、愛欲の絆を切捨て、死し、武將三浦義固は、

討つ人も討たるゝ人も土器よ

碎けて後はもとの土くれ

と死後を大觀し、良寛禪師は、

かたみとて何か残さん春は花

夏ほとゝぎす秋はもみぢば

と詠みて、死の自然にして其の之に對する平素の注意を述べ、赤穂義士の

巨魁大石良雄は、

惜しまるゝ時散りてこそ世の中の

花も花なれ人も人なれ

と心中の得意を洩らし、不識庵上杉謙信は、

一期榮華一杯酒 四十九年一醉間

生不生死亦不死 歲月只是如夢中

と吟咏して陣中に歿した。また或乞食は某寺の門前に、

知り知らぬ憂さ嬉しさの果は今

もとの裸のもとの身にして

と辭世の和歌を書き付けて往生したが、之だけは何人にも共通な事實であつて、生れ出た裸のもとの身で死ぬ時が總べての人間に来る。多田八千次郎といふ人の辭世には、

詩も歌も達者ならちによんで置け

とても辭世は出来ぬ死ぎは

とある。如何にも其の通り、生死一如の哲理を悟らぬ人には逆も辭世の詩歌を詠やうな、綽々たる餘裕もなければ、又從容自若たる態度も保てまいから、生前に辭世の一つも拵へて置くがよい。

### 笑つて暮せ

樂あれば苦あり、苦あれば樂ありて、凡そ人の世は何事も思ふやうに行かぬのが其の常態である。古歌に

三度炊く飯さへ堅し柔かし

思ふまゝにはならぬ世の中

とあり、また、

世の中を思ひまはせば摺鉢の

甘い日もあり辛い日もあり

といふ狂歌もある。何れも喜怒哀樂の上に超然として世を渡れといふ寓意

である。此の中は笑つたからとて税金を取られる譯でもないから、出来る事なら人間一生笑つて悠悠自適の日送りをしたいものである。

身即成佛

澁が多くて迎も食ふことの出来ない澁柿でさへも、一轉すればそのまゝ甘い吊柿となつて賞美される。即ち

澁柿や澁のまゝにて吊柿

である。煩惱具足の凡夫でも、一轉して磐石の信仰を得れば其の身其のまゝ佛となる事が出来る。

惚薬

昔は惚薬といへば蝶螺の黒焼に限られたものであつた。併し今は時世ががらりと一變して、

惚薬何がよいかと蝶螺に聞けば

今ちや俺より佐渡の土

と相場が一定してしまつた。註に曰く、佐渡の土即ち金、即ち黄白紙幣である。併し貞操を金銭づくで左右し、其の他總べての價值判断を金銭づくで決することだけは何とかして改造したいものである。

婦人の寶冠

男が其の不身持、不品行を棚に上げて、女にのみ貞操を強ひるのは我が儘

な沙汰である。と言つて、女も亦放縱なるべしといふことは甚だ不合理である。家長か絶対の権利を有する家族制度の爲に、永い間虐げられて来た女が人間としての権利に目覺めて、因襲道德の屈從から水平線上に浮び出でんとすることは極めて喜ばしい傾向である。併し女は貞操を度外視しては、もはや其處に人格價値を見出せぬから、男として女に望む所は矢張り古人の言の如く「貞操より出づる勇氣は婦人の寶冠である」ことで、若し此の期待に背かば妻は夫の最悪の家財たるに終るであらう。俗謠に、  
君と寢ようか五千石取るか

何の五千石君と寢る。

とあるが、貞操正しき女は金銀財寶の誘惑より免れて愈々其の人格の光りを放つものである。

### 成功者の資格

或書に成功者の資格を説きて、

人若し水の如く潔白、火の如く熱心、曆の如く時勢に後れず、時計の如く分陰を惜しみ、鐵砲の如く目的を誤らず、刀の如く果斷に、雷の如く大膽に、電の如く機敏に、望遠鏡の如く遠大に、顯微鏡の如く小事に注意し、槌の如く根氣よく、錐の如く一貫し、靴の如く一歩づゝ歩み、山の如く動せず、川の如く絶えず活動し、海の如く度量廣く太陽の如く公明正大ならば何事も必ず成就すべし。

と云へり。然れど斯くの如きは到底望むべからることなざり。成功の資格は此の中唯僅かに二三の徳を兼ねるだけにて十分なり。

益軒の六本

- 一身を修め一家を整へるには六つの慎みが肝要である。貝原益軒は之を修身整家の六本と稱してある。即ち、
- 一、酒食を過すは病を生ずるの本
- 二、言語を慎まざるは禍の本
- 三、思案せざるは過失の本
- 四、私慾深きは身を滅ぼすの本

- 五、忿怒を忍ばざるは争の本
- 六、儉約ならざるは困窮の本

メ括り

大綱和尚の瓢箪の畫賛に曰く、

うか〜と暮すやうでも瓢箪の胸のあたりにしめく〜りありとあるが、人間にはすべて此のメ括りが大切である。

座禪の三不足



座禪をするのに三不足を慎めといふ事がある。それは左の通りである。

一、衣服が足らずして身體に冷氣を覺える事

二、食物が足らずして腹に力のない事

三、睡眠がたらずして頭の重い事

これは單り座禪のみならず、學問をするにも、執務するにも、其の何事に  
も慎むべきことである。併し其の反對の三過多も亦衛生上慎まねばなら  
ぬ。即ち

一、衣服を多く着過ぎて温かになる事

二、食物を多く食ひ過ぎて苦しい事

三、睡眠を多く取り過ぎてぼんやりする事

古人が「過ぎたるは及ばざるが如し」と言つて戒めてゐるやうに、多過ぎる  
のも悪ければ、不足するのも亦悪い。併しどちらかと言へば、衣食其の他  
日常生活上の事は不足の爲に禍を受けるよりは、過多の爲に害を招く場  
合が遙かに多い、乃で、三不足を慎むと共に三過多も亦慎まねばならぬ。

### 金貸の人物鑑定法

昔、尾張知多郡大野といふ所に彌兵衛といふ金貸が居つた。彌兵衛は、誰  
でも金を借りに来ると、快く迎へ來れて其の人物を見定めた後に金を貸し  
たといふ、其の人物鑑定法は斯うである。先づ茶を入れ、茶菓子には必ず  
熬豆を出し、二人差向ひで色々話しながら、自分も喰ひ、借りに來た人

にも勧めて食はせる。其の時、初め小粒な熬豆から段々大粒なのを選び出して食ふ人には金を貸し、大粒な熬豆から段々と小粒なのを拾つて食ふ人には決して貸さなかつたといふ。又此の手で人物を確かめ、先づ大丈夫と見込んで貸しても、其の借人が金をいたゞきもせず、其の儘直ぐ財袋に押込めでもすると、「コレ／＼、その金には少々損傷がある、取りかへて上げよう。」と言つて其の金を取戻し、「そのやうに金を粗末にする人には貸す金がない。」と、更めて謝絶したといふことである。

### 喜の配當

ラスキン嘗て人生を論じて、

此の世には悲しみの配當よりも喜びの配當極めて多し。唯汝が是を取ると取らざるとに依るのみ。

と曰つたが、實際世の中の事は何でも心の持ちやう一つである。例へば貧に處して之を楽しめば貧がなく、苦しみを楽しめば亦苦しみが無いやうなものである。

### 老病死

老病死の三つは到底何人にも免れ難き既定の事實である。それにも拘らず人は尙且其の生に戀々熱着して、無病強健法を學んだり、不老長生術を修めたり、甚だしきに至つては不老不死の靈藥を求めたりして居る。無病

は喜ぶべく、又願ふべしと雖も、不老長壽乃至不死は果して幸福であるかどうかといふ事は實に疑問中の大なる疑問である。シヨウペンハウエルは長壽の極めてつまらないことを論じて、

人若し二代も三代も生き永らへなば、其の生涯は同一の手品を二三度続けざまに見るが如き心地すべし。手品の面白きは最初の一回だけなり。一度見て其の種を知れば再び之を見るも興味なし。人生も亦斯くの如きものなるべし。

と言つてゐる。長生は同じ話を二度聞くやうなもので、全く興味の無いものであるにもせよ、其の死に對しては何人も恐怖の念を抱かずには居られまい。そこでシセロは、

人は其の臨終に於て毫も恐るゝことなく瞑目し得るやう平生自己の心を慣し置くべし。若し然らずんば、安心は一瞬時もあるべからず。死の不可抗は極めて確實なればなり。

と戒め、また希臘の或哲人は、

予は死を恐るゝにあらず、徒らに死するを惜しむのみ。

といひ、リケルトは更に一步深く切込んで、

汝は自己を中心となす限り、死は必ず汝を惱ますべし。自己を捨て、永久不滅の宇宙と同體に感ぜよ。是永生の道なり。

と説いてある。蓋し宇宙と同體に感ぜよとは宇宙と共に生きよといふ意味である。

六人の盜賊

興教大師曰く、

我等が身には晝夜六人の盜人事に觸れ時に隨つて隙を窺へり。一人は色の盜人、眼を仲人として來る。一人は聲の盜人、耳を仲人として來る。一人は香の盜人、鼻を仲人として來る。一人は味の盜人、舌を仲人として來る。一人は觸の盜人、身を仲人として來る。一人は法の盜人、意を仲人として來り誑すなり。是を六賊とは云ふなり。此の中にて意を迷はす盜人を第一の大將軍と云ふ。故に此の一心を靜かにすれば、餘は皆靜まる。

と、實に惡業の馬頭、貪慾の惡鬼、破戒の羅刹、嗔恚の夜叉、愛欲の虎狼は欲しや憎やの妄心邪念より起るものなれば、常に煩惱の迷雲を拂はざるべからず。

一道上人のいろは歌

一道上人が空海のいろはを歌詠み込んだものに斯麼な歌がある。即ち、  
幻のいろはにはほとちりぬるを諸行無常と知るや知らずや  
定めなきわがよはなれれぞつねならむ是生滅法と入相のかね  
うゐのおく生死のやまをけふこえて生滅滅己音も香もなし  
あさきゆめみし夜は覺めてゑひもせず寂滅爲樂ねはんならずや

謙遜の餘裕

諺に出る杭は打たれるというてあるが、謙遜の徳を忘れて應對言語總べて横柄な者は必ず世人に疎まれ、遠ざけられ、隨て立身出世がむづかしい世の中は左様然らば御尤も

さうでムるか確と存ぜぬ

處世の要訣、唯此の一首に盡されたる通り、成るべく胸中に謙遜の餘地を存して、卑屈に陥らぬ限りは常に他人の言行を受入れることが肝腎である。

酒のいれもの

文化の頃、江戸田安侯の臣に唐衣橋洲といふ狂歌師あり。性、頗る酒を嗜みしが、或時、畫家某をして己の肖像を描かしめ、之に自賛して、

青雲の志は花鳥に奪はれ、白雲の情は風月に誘はれて、明けては酌み、暮れては飲み、たゞ醉郷に身をはらし、壺中の天地を睥睨に見て  
つい白髪の年となりぬ。

いたづらに只の親父となり瓢

身の能としては酒のいれもの

といへり。酒のいれものとなりて世を終るが如き決して讀むべきことにあ

らず。

處世藥秘方

或人、毎朝一貼づ、服用すべしとて示したる處世教訓藥法左の如し。

一、簡略 五夕 餘情の皮を去りて工夫の水に浸す。

一、始末 四夕 慾心を去り心の水に浸す。

一、世帯 四夕 世間の上皮を去り眞實の水に浸す。

一、堪忍 二夕 其のまゝ用ふ、鐵箸を忌む。

一、算用 一夕 算盤にあて成るほど細かに刻む。

右五味、思案の藥研にておろし、眞實のほいろにかけてふるひ、分別の

糊を以て丸め、智慧の衣をかけ、一時に一粒づゝ噛みて用ふべし。

心の闇

古い歌に、

慾深き人の心と降る雪は

積るにつけて道を忘るゝ

とある通り、慾に目の暗むのが人の常であるとは云へ、

誰も見よ滿ればやがて缺く月の

十六夜の空や人の世の中

と悟つたならば、

思ふこと一つ叶へば又二つ

三つ四つ五つ六づかしの世や

など、迷ふまでもなかるべし。

### 一念の轉處

心迷へば淨土も穢土となり、心悟れば娑婆も淨土となる。されば、

傀儡師胸にかけたる人形箱

鬼を出さうと佛出さうと

も亦自由自在で、善悪苦樂はたゞ一念の轉處によつて分れるのである。

### 伊達政宗の修養

伊達政宗、嘗て大閤秀吉より立派な茶碗を貰つたので之を家寶として珍重して居た。一日、政宗、之を手より落して割つたので、思はずハツと聲を放つたが、其の時、自ら大いに悔い、

『苟くも奥州五十四郡の主とも云はるゝ者が僅かに一つの茶碗を割つて心を動かすやうではならぬ。』

と、爾來頗る反省したといふ逸話がある。こゝが流石に政宗の偉い處であるが、其の遺訓に、

仁に過ぐれば弱くなり、義に過ぐれば堅くなり、禮に過ぐれば諂とな

り、智に過ぐれば嘘をつき、信に過ぐれば損をする。

氣を長く、心穩かにして、萬に儉約を用ひ、金を備ふべし。儉約の仕方是不自由を忍ぶにあり。此の世は客に來たと思へば何の苦もなし。朝夕の食事うまからずとも賞めて食ふべし。元來客の身なれば好き嫌ひは申されまじ。今日之行おくり、子孫兄弟によく挨拶して娑婆の暇申すがよし。

とある。

### 動中の靜、靜中の動

勝海舟の座右の銘に曰はく、

「自ら處すること超然、人に處すること肅然たり。事なれば澄然、事あれば軒然たり。得意には淡然、失意には泰然たり。國民の要する所は元氣にして、國家の要する所は人材なり。」  
とある。是實に修養の極致であつて、所謂動處に靜し、靜處に動する者の境地である。

### 夫の改心

昔、或男が新枕末變らじと契つた、その妻を疎んじ、竊かに他の女と戀に陥つて深く情交を重ねて居た。けれども、妻は少しも夫の薄情を心にかげず獨り松の操を守つてゐた。一夜、獨り寢の淋しさに秋の夜長を物思ひつゞ



けて居ると、妻呼ぶ鹿の聲が遠く枕に響いて來たので、

我もしかなきてぞ人に戀ひられし

今こそ外所に聲をのみ聞け

と讀んで、昔を偲ぶのであつた。後、其の夫、ふと此の歌を見て大いに我が身の非行を悟り、直ぐ女と手を切つて妻と仲睦じく暮したといふ。

### シーザーの克己

何事も自分の思ふやうにしたいのが人情で、それが出來ぬから腹が立つ。て、自分の思ふが儘にしたいといふ我見を除き捨てさへすれば、腹も立たず、疝癢も起らなくなる。昔、羅馬の豪傑シーザーは疝癢が起りさうにな

ると、直ぐに其の國のいろはを口の中に唱へて、我ど我が焦立つ心を静めて居たといふ。これは何でもない事のやうであるが、我見、短慮、忿怒等に打克つことはなかく、容易でない。また、  
理齋隨筆に短慮を戒めて、

一には後悔あり。

二には物ぐるし。

三には其の愚をあらはす。

四には智ある人、親しまず。

五には他人に仇の思をなす。

六には器を減ず。

七には病を生ず。

八には争ひ多し。

九には苦勞多し。

十には衆惡發す。

と述べてある。短慮は其の身を破る、慎まねばならぬ。

### 當意即妙

或寺の小僧が庭掃除の時、誤つて蘭の鉢を棚から落して毀した。和尚は日頃其の蘭を好愛してゐたので、腹立ち紛れに小僧を睨み付けて叱り飛ばすと、小僧は一向平氣なもの、

一らんし二らんで見れば三らんす

四らん顔して五らん遊ばせ

と口吟んで洒々落々。流石の和尚も其の當意即妙に感じて笑ふより外なかつた。

### 人生の長短

ベレレー曰く、

『我等は年に生きずして事業に生き、呼吸に生きずして思想に生くべし。最も多く考へ、最も高く感じ、又最も良く行ふ者は最も長生するものなり。』

と。然り人生の長短は其の年齢にあらずして、其の事業の質と量の多少に依りて定まることを忘れてはならぬ。

### 目が物を言ふ

諺に目が物を言ふといふことあり。顔色を見れば大抵其の人の心中が讀めるとの意味なり。エマーソン嘗て、

人あり、若し其の口に於て諾と言ふも、其の目に於て否と言はゞ、余は口を信せずして目を信ずべし。

と曰へるも亦同じ意味なり。

### 鼠小僧次郎吉と金錢の貸借

鼠小僧次郎吉は金の無心を受けると、何時も胡座の股ぐらから金を掴み出して、快く、

「サア、持つていけ。」

と言ひながら、手をぐいと後方へ廻し、決して其の借人の顔を見ずに貸して遣つたものである。兒分どもはそれを不思議に思つて、

「親分、あなたが金錢を貸すのに、いつも手を背後へ出して遣るのはどういふ譯か。」

と聞くと、

「さればサ、人の身の上はあてにやならぬ。今日絹布を纏うてゐても明日は菰を着るやうになるかも知れぬ。其の時、若し借手の顔に見覚えがなくなれば返して呉れと言はずに済むし、借手も亦心苦しい思をせず済む譯だ。それで俺は手を背後へ出して其の人の顔を見ぬのぢや。」と答へた。しかし若し諸君にして據なく借金したならば、貸した人は借りた自分よりも記憶がよいものであつて、動もすれば之を恩に着せたり、吹聴したりするものであると思へ。そして貸主の請求を待たず、借りる時の地藏顔で返せ。またどうせ金を貸するならば、鼠小僧次郎吉の心を以て我が心とせば、借主の返す時の閻魔顔も亦見ずに済む。

### 病氣と弱味

進化論の鼻祖ダーウ井ンは非常に病弱で、四十年間一日として健康の快樂を知らなかつた程である。或日、其の友人が、ダーウ井ンの勉強が餘り度に過ぎるので、たゞさへ弱い身體に害あるべきを心配して、其の事を忠告した。處が、ダーウ井ンは、

『病氣は少しでも弱味を見すれば、直ちに其の虚に乗じて來るものだ』と答へて、矢張り孜孜として勉強した。

此の話に似通つた話が老人雑話に載せてある。藤原惺窩、淺野紀伊守に「憂患に生き安樂に死す」といふ、孟子の一節を講義した。其の講義が終ると、

紀伊守は、

「私は石田治部と仲悪かつたので、治部の存生中は自ら勵んで他人に非難されぬやうにしてゐた。當時は其のお蔭で身體も精神も健固であつたが、今は治部も死んでしまひ、其の上御所の思召しもよく、佐竹島津にも異ならない。之に依つて氣がゆるみ病氣却つて生じた賢人の言葉は少しも事實に違はぬ。」

と述懐して、孟子の言を裏書したといふ。

### 毀譽褒貶

マーカーといふ人が世間の毀譽褒貶に就いて皮肉な面白いことを言つてゐる。

即ち

人を譽め、人を良き様に云はんことは何人にも容易く出來得べし。されど、人を謗り、人を惡し様に言はぬことは尙更容易なり。开はたゞ沈黙の儘にて、而も何の資力も勞力も要せざればなり。常に我が頭の蠅を拂つて居れば、世の中は何時も平穩である。

### 致富の要訣

古來致富の秘傳要訣として數へられたものを見るに、正直、勤勉、節約、忍耐、機敏、果斷、勇氣、細心等種々の徳目を擧げてあるが、こゝに又一つ注意すべき要訣が殘されてゐる。开は即ち、

自家の業務に怠らず、常に其の改善を促し進歩を圖りて人の信を得るにあり。然れども、其の最も必要なるものは既に企てたる事、若しくは企てんとする事の成就するまで決して之を他言せざることなり。と説けるバンダビルドの言葉である。

### 否の一語

スマイルス嘗て、

言ふべき時に否といふは人生の平和と幸福との要訣なり。物事に處して否と云ふこと能はず、また言ふことを欲せざる人は概ね零落するものなり。

といへるは、總べて不合理なる事に對して否と云ひ得る勇氣の必要を説きたるものなり。

### 心の内の亂髮

心を培はず、外形にのみ力を入れて居ては何時まで経つても、其の人格が光らぬ。然るに世人は只管衣服、髪飾り等の如き外形の美を整へることに腐心して、却つて心の内を掻き亂してゐる。武權衡録といふ本に、  
剃りたきは心の内の亂髮

頭のうへは兎にも角にも

といふ一休和尚の歌を載せてあるが、心の内の亂髮さへ剃つてしまへば、

何人でも人格的に價値づけられた楽しい生活が出来る。物慾の絆に左右されて居る中は焦燥不安常に心が落付かず、人格が愈々低劣の程を高めるに過ぎない。

### 融通無碍の境地

昔、或處の山王權現に親子四疋の猿が居つた。一日、子猿の甲は手を以て其の目を蔽ひながら、

『目は諸慾の仲介で、不義不道多く目を通じて来る。故に吾は何物をも見ざるたらん。』

と云ふ。子猿の乙は之を聞くや、其の手を以て口を箝して、

『口は禍の門、吾は何事をも言はざるたらん。』

と云ふ。やがて子猿の丙は手を以て其の耳を塞ぎ、

『耳は惡聲を聞き、心之に應ず。故に吾は聞かざるたらん。』

と、子猿ども何れも得意満面の體である。乃て、親猿は子猿を顧みて、

『目は見るのが役目、口は言ふのが役目、耳は聞くのが役目である。』

猶砂糖の甘きは其の役目にして、唐辛の辛きは其の役目なるが如し。

抑々役目を捨て、何の價値がある。』

と鐵案を下して、子猿どもの主張を否定した。子猿ども之を聞いて非常に感ずる處あつたが、一同口を揃へて、

『然らば親猿は何の猿ぞ。』

と反問すれば、

『吾はたゞ思はざるなり。』

と答へた。人も亦此の親猿の如く妄想を思はざるに至つたならば、必ず柳暗花紅如是の眞消息を解し得られるのである。誰やらの歌に、

思はざる見ざる聞かざる云はざるも

かゝはらざるに勝らざるらん

といへるは更に一步を進めて融通無碍の境地を示したものである。

### 口は幸福の門

東洋では口は禍の門といひ、西洋では雄辯は銀て沈黙は金であるといへる

共に饒舌を戒めた言葉で、寡言を徳とすることは東西其の揆を一にしてゐる。けれども、人間は何も言はずに黙り込んでさへ居ればいゝのではなく、談ずべき時には談じ、黙すべき時には黙して、唯其の時を誤らないことが大切なのである。

多辯は固より慎まねばならぬが、言うて然るべき場合には何時何人の前でも堂々と其の信ずる事を言ふがいゝ。寡黙主義の因襲に囚はれて消極的に世を渡るよりは、寧ろ口は幸福を招く門と考へて、自ら其の身を教育すれば口舌の過は少くなる。三寸の口舌は末で、無形の精神修養が本である。

### 金の世の中



各種の階級を通じて人格尊重の聲高きこと現代に如かず、これ餘りに黄金萬能主義に中毒した反動であるが、實際、金さへあれば馬鹿でも旦那サマで通れる世の中だから、全く厭になる。恬淡無慾、あの人間離れした一休和尚でさへ、

世の中は心矢橋と走れども

せし(錢)が無くては渡られもせず

と喝破したが、如何にも尤もと肯かれるではないか。況して、

佛ほど世に慾深きものはなし

あけ六つもかねくれ六つもかね

と云ふ諷刺もあるまで、總べてが物質的になり、拜金的になつた時世であるから、

るから、

世の中はみな風鈴と思ふよし

金がなくてはならぬ世の中

と考へて、能く身を處して行かねばなるまい。併し金は天下の廻りもの、總べてを金錢づくで解決しようとすることは大きな誤解である。

### 貧兒の讚

腕一本、脛一本の外、身に着くべき何事をも有たぬ貧兒ほど世に幸福な者はない。人世の旅路に上る貧兒は恰も大きな希望の空袋を背負つてゐるやうなもので、働けば働くほど其の袋が充實する、重くなる。而もそれが悉く

我が汗の賜物であるといふ奮闘感に對して無上の愉快が伴ふ。貧乏を悲觀するが如きは實に思はざるの甚だしき者である。前途に大なる希望を有する現在の貧乏と力行ほど幸福なものはないと悟つたら、遺産といふ親譲りの重荷に苦しんでゐる富家の子女を羨むに及ばぬ。近き將來を見よ、俺も此の腕一本で叩き上げて見せるから。此の元氣が何より必要である。カーネギー、嘗て成功の秘訣を人に語つて、

「人生の行路に上るや、其の身先づ貧家に生るゝことが最も緊要である。何となれば、貧兒の英氣、やがてこれ成功の原動力だから。と言つたが、此の原動力は決して貧兒を其の儘にして置かぬ。裸一貫から身を起した鹽原多助も亦、

「俺は貧乏だなどといふ考をやめにして、たゞ無茶苦茶に天地へ奉公して居りさへすれば、天運で自然と金が出来、天がそれだけの樂をさせてくれる。」

と説いてゐる通り、貧乏なればこそ富貴になれるのである。甘き涙を知らんと欲せば先づ酸き涙の味を嘗めなければならぬ。貧乏時代の艱難辛苦は寧ろ幸福を生む父母である。

### 金錢は惡魔の如し

地獄の沙汰も金次第とやら、げに金錢は萬人を頓首せしめる唯一の力かも知れない。併し人をして眞に富ましめる者は金錢に非ずして心である。即

ち人は其の心の姿次第で、或は富む人ともなり、或は貧しき人ともなるのである。フ井ルデング、嘗て世人を戒めて、

汝若し金錢を以て汝の神となさば、金錢は悪魔の如く汝を惱ます。と言つたが、眞に其の通りて、貪れば必ず其の身を害ねる。故にシセロも亦、

金錢の富より得たる不幸ほど不幸なるものはあらず。と言つて、世人を警告してゐるではないか。

男の見た女、女の見た男

マクス、オーレルの云へる言葉に、

男は一人の女に悪し様に扱はれても、凡べての女を悪しくは言はず  
女は一人の男に悪しく扱はるれば總べて男を悪しざまに云ふ。

とあり。

心を直せ

昔、或寺に釋若雲とて來世には佛果を得べき猫が居つた。一日其の猫の前に大きな鼠が落ちて來た。鼠は猫を見て大いに驚き、直ぐ欄間に飛上つてわななく、慄へてゐると、猫はそれを訝つて、

若雲とて身は墨染になりぬるを

何とてねずみ姿隠すぞ

と一首の歌を詠んで、もはや殺生戒を犯さぬと言つた。鼠は之を聞いて、  
若雲とて身は墨染になりぬとも

爪と眼はまへに變らぬ

そこはく乍ら返歌した。姿ばかり如何に殊勝らしく見せかけても、其の  
心を直さなければ誰も相手にしまい。

信長、秀吉、家康の優劣と成功の秘訣

川柳子、性急な織田信長の性格を評して、

鳴かざれば殺してしまへ時鳥

といひ、また放恣な豊臣秀吉の性格を正寫して、

鳴かざれば鳴かせて見せん時鳥

と歌ひ、更に忍耐強い徳川家康の性格を寫して、

鳴かざれば鳴くまで待たう時鳥

と表してゐる。此の三句何れも三英雄の性格を遺憾なく表現し批判して、  
其の面目躍如として見るが如く、また其の優劣、成敗を語つてゐる。

また甲者が餅を搗き、乙者がそれを丸め千切つてゐると、丙者が其の傍で  
頬張つて居る繪がある。これは林梅林の作だと言ひ傳へてあるが、其の自  
畫自讃に曰く、

織田が搗き羽柴がこねし天下餅

骨も折らずに食ふが徳川

とある。是も亦實に信長、秀吉、家康の性格、功業の一端を語るものであつて、此の一首こそ無限の處世訓を含んで居るではないか。即ち信長や秀吉は亂世の天才であつて、功を急いで却つて失敗し自滅したが、獨り家康のみは少しも成功を急がず、徐々に其の地盤を固めて時機の到來を待つて居た。初め信長の滅後、構へて秀吉と先を争ふやうな事をせず、寧ろ秀吉の成功を助けて海内統一の偉業をなさしめ、關が原の戦後十年の間は陰忍持久して、世人が天下の禍根の大阪なることを承認するに至つて漸く一撃を加へたのである。

斯くの如く家康は頽齡七十歳を超えて始めて成功の曙光に接したので、其の半生は實に逆境の連鎖ともいふべく、其の苦辛經營の跡は平生に處する

我々凡人の模範とし標準とするに最も適してゐる。消極的の嫌はあるが、成功の秘訣は實に天命に順ひ成功を急がぬことであるが、家康の遺訓を見ればこの道理が平明に説かれてゐる。即ち、

人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし。心に望み起らば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基。怒りは敵と思へ。勝つことばかり知りて負くることを知らざれば、害其の身にいたる。己を責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるより優れり。

といふのであるが、大なる功業を立てようとする者は如何なる艱難辛苦をも厭はず、失敗蹉跌しても悲觀せず、永く忍耐して用意周到其の理想の實

現に努力せねばならぬ。三英雄の事蹟の跡を検する者、宜しく思を此處に致して以て心の糧とするがよい。

### 學問の中毒

三浦梅園、嘗て門下生を戒めて、

學問は其の置き所によりて善惡別る、臍の下よし、鼻の先惡し。

學問は飯と心得べし、腹に飽くが爲なり。懸物などのやうに人に見せんが爲にはあらず。

學問は臭き菜の様なり。疾く臭味を去らざれば用ひ難し。少し書を読めば少し學者臭く、餘計書を読めば餘計學者臭し、困つたものなり。

と曰つた。今の學生もどうやら此の箴言を味ふべき資格ある。

### 空虚な頭

學問、財産等を鼻にぶら下げて、つんと濟したるは見苦しいものである。歐羅巴の諺に、

學者と稻の穂とはよく似たる所あり。頭の空虚なる間は反り返りて居れども、實のるに隨ひて次第に俯向く。

と言ひ、また古き發句に、

實のるほど頭の下がる稻穂かな

といつた。謙遜の美德を賞揚すること、東西其の揆を一にせるは面白い。

蜀山人の禁酒

狂歌で名高い蜀山人の酒好きと云へば恐らく前代未聞であつて、

朝もよし晝も尙よし晩もよし

其のあひく〜にチヨイ〜とよし

と讀んだ程であつた。一日、彼、驟然として酒の害を悟り、よくも思切つて禁酒した。けれども、其の根強い飲酒癖は逆もそれを永くは續けさせなかつた。やがて、彼は雜作もなく其の禁斷を破つたのみならず、

我が禁酒やぶれ衣となりけり

さあさして呉れさあついで呉れ

と詠んだといふ。世の中を白眼して過す者ならばいざ知らず、凡人凡才にして尙飲酒に耽りて其の習慣を打破し得ぬが如きは一生見込のない人間である。

心の若さ

寶曆の頃、幕府の小普請方を勤めたる者に白龍館卯雲といふ人あり、狂歌を以て其の名天下に聞ゆ。老後、日々火桶に親しみて、寸時も膝元を離さざりしが、一日、其の火桶を撫で廻しつゝ、

抱へてはなかく〜暇遣りがたし

火桶は老の妾同前

と詠めり。これ素より老來無聊の一狂歌に過ぎざれば、彼是批難すべき理由も無し。されど是からの青年には、

四十五は鼻垂小僧

男盛りは七八十

といふ旺盛なる元氣と心の若さが特に必要である。

物は見様

昔、江戸の詩人福井學圃は質屋を開き、京都の詩人神田香巖は金貸を営んでゐた。甲者、此の話を聞いて、

『それは詩人の生活に似合はぬ、餘りに卑俗である。』

と評した處が、乙者はそれを打消して、

『いや、物はすべて見様である。詩人が質屋を開き金貸商賣をしてゐると思へばこそ俗にも聞える。けれども、之を反對に質屋の親爺や高利貸が詩を作るといへば却つて頗る風雅に聞えるではないか。』  
と言つた。物事は總べて見様に依つて理窟が付く。

論語讀まずの論語知らず

聖學自在といふ本に、

『論語讀みの論語知らずは、少しにても讀みたるが根となりて義理の二葉を發くこともあるべし。論語讀まずの論語知らずは、根となりて



生出づべき種なし。』

との一節あり、面白き言葉なり。

四句分別

佛教では報恩以德、報恩以仇、報仇以德、報仇以仇の四つを四句分別と言つてゐる。恩に報ずるに徳を以てす、即ち恩を恩て返すは理の當然で、

長々の世話に報いる菊の花

といふ發句は其の意味を表してゐる。また、

手と頼む垣引き倒すふくべかな

といふのがある。是は恩に報ずるに仇を以てす、即ち恩を仇て返したものの

で世間には斯ういふ恩知らずか澤山に居る。然るに之と全く反對なのは、

手折らるゝ袖に香るや梅の花

である。斯く仇を恩て返し、總べて仇に報ずるに徳を以てする境地に入れば世の中は極樂である。不平なく、不満なく、懊惱なく、満足感謝の樂しい生活が出来る。所が、眞に生きること忘れて、利慾に營々たる者は、例へば、

切りに來た手を切り返す芒かな

の一句の如く、常に仇を仇て返して哇み合つてゐる。凡そ人間は仇に報ずるに仇を以てする間は駄目である。仇に報ずるに恩を以てする境界に進まなければならぬ。

親切第一

或人が世の中で最もよいものは何かと自問自答の末、多くの人に尋究して見た。所が、學者は「知識」といひ、哲學者は「真理」と答へ、愚者は「享樂」と應じ、守錢奴は「金錢」といひ、警官は「秩序」といひ、從者は「美貌」と答へ、婦人は「衣服」といひ、有徳者は「家庭」といひ、宗教家は「愛」といひ、軍人は「名譽」といひ、教育家は「創造」と答へ、個人主義者は「自由」と叫び社會主義者は「平等」といひ、道徳家は「善」といひ、藝術家は「美」と答へたけれども、其の人の心は求めて未だ盡さぬ所があり、甚だ物足らなく感じ居ると、偶然にも、

『總べての人の心の奥の其の奥には、それは「親切よ」と囁いて居るてはないか。』

と云ふ天來の聲を聞いて、大いに満足したといふ嘯がある。然り親切は積極的善行爲の大なるものであつて、他人の爲に自分を犠牲にしても之が爲に些かも苦痛を感じざるのみならず、却つて心身活躍して靈性の満足と快樂を覺えるのである。若し世人が悉く親切第一を處世主義として生活するならば、人和し、家榮え、國興りて此の世は必ず極樂淨土と化するであらうと思ふ。

立身すべき天運

何人でも自ら其の額に汗して食はんとする者は必ず一定の職業に就かねばならぬ。人に能不能あり、また適不適あるから、それ〴〵其の好む所の業に就けば必ず成功する。エマーソン曰く、

人間には或種の職業を嗜好する性癖あり、選びて其の職業に従事すれば、必ず世に用ひられて幸福を受くべし。之を立身すべき天運といふと、誠に明言である。各人皆自分の趣味、才幹、技能、健康等に顧みて、エマーソンの所謂立身すべき天運を取逃さぬやうに注意し、且一人一業主義を厳守して其の職業の爲に終始一貫、眞面目に奮闘せねばならぬ。

### 一條の退路と出路

徐大室曰く、

得意の時に當つて須らく一條の退路を尋ねべし。然る後安樂に死せず、失意の時に當つて須らく一條の出路を尋ねべし。然る後憂患に生くべし。

と、是平素の心得を示したる嘉言として聞くべし。

### 夫婦かため

或男が眇の女と結婚した。三々九度の酒宴の席上で、花聲から花嫁に盃を差しながら、

今宵こそ夫婦かための杯を

一つのめのめ一つのめのめ

と、歌つて、それとなく女の眇を諷刺した。處が、女は顔こそ醜いが賢婦人である、早くも其の意を悟つて笑ひながら、

みめよきは亭主の爲にふためなり

女房は家のかためなりけり

と返歌したといふ。未婚の男女宜しく自省するがよい。

### 金が欲しくば

金が欲しくば勤と進み、儉と止まらねばならぬ。勤は精勵で、儉は知足である。勤ありて儉なきは恰も底なき桶に水を容れるが如く、儉ありて勤なきは桶に入れたる水の次第に腐るやうなもので、其の一方に偏するのは何れも悪い。貧乏を苦にする者は先づうんと働け、働いて其の必要以外の費用を約めることが肝腎である。

苦にするな金は世間にうんとある

それが欲しくば働いて取れ

### お口の用心

圓い玉子も切りやうて四角、物も言ひやうで角が立つ習なれば、片言隻語も輕卒にしてはならぬ、古人誠めて歌へるあり、曰く、

やはらかに物言ひならへ假初に

理窟がましき言葉使ふな

と。また、

口開けば五臓も見ゆる通草かな

とて、多辯を戒めた教訓の句もある。これはソモロンの、

賢者の口は心になり、愚者の心は口になり

といへる金言と共に大いに服膺すべきである。又ジョージハーバートが、

適當に語るべし、然らずんば賢明なる沈黙者たれ

と教へた甲斐もなく、兎角人の舌は迂り勝ちである。されば佐藤一齋の曰

へるが如く、

好みて大言を爲す者あり、其の人必ず小量。好みて壯語する者あり、

其の人必ず怯懦。唯言語大ならず、壯ならず、中に含有する者、多く

はこれ識量弘恢の人物。

と思へば大抵間違なし。また北條時頼の歌に、

語るなと人に語れば其の人も

亦語るなと語る世の中

人の上を云ふより科の起るぞと

思うて口をつゝしめよかし

禍の門は口ぞと心得て

開くるたびく用心をせよ

とあり。何れも平凡ながら、千古の眞理である。

迷の絆

昔、上野國上の郷といふ所に行仙房といふ念佛僧が居つた。或人が行仙房に對つて、『念佛してゐる時にも妄念が起つて來るが、これはどうしたら防げるか』と問ふた。其の時、行仙房は、  
あともなき雲に争ふ心こそ

なか／＼月のさはりなりけれ

と詠んで、其の質問に答へた。誰やらの歌に、

雲はれて後の光りと思ふなよ

もとより空に有明の月

とあるが、迷ひの絆を断たねば心のまことが何時までも光らない。

福の神と貧乏の神の託宣

心學者手島堵庵、福の神の託宣を録して、

一に一切素直にて、二に柔和て慈悲深く、三にさからひ争はず、四つに善し惡し辨へて、五つ五つの人の道、六つ無理せず無理云はず、七つ中よく交れば、八つ家内が嬉しがり、九つ子たちや孫までも、十で富んで榮えた福大極を見さいな。

と曰へば、虚實齋は之と反對に貧乏の神の託宣を述べて、

一に意地がきたなうて、二に苦い顔付て、三に先操りばかりして、四

つ慾が深く、五つ何時も働かず、六つむごい事ばかりして、七つ情がない故に、八つ家内がばたくと、九つ小言の絶間なく、十てとんで仕舞ふた。

と言つた。言、鄙俗なれども、彼此頗る對照し來れば頗る面白い。

### 品性のみ人を救ふ

ブラツキー曰く、

金錢も、權力も、自由も必要ならず。恐らくは健康も唯一の必要物にあらず。たゞ品性のみ人を救ふの力あり。若し品性に依りて救はれずとせば、人間は到底墮落滅亡を免かるゝこと能はざるべし。

といつて居るが、實に品性こそは人間の價值判斷の水準であらねばならぬ又ベコーンは左の三方法を以て品性試験の最良手段としてゐる。即ち、

- 一、其の獨居の時に於て 獨居の時は毫も虚飾の必要が無いから。
- 二、其の激怒の時に於て 激怒は何人も其の本性を暴露するから。
- 三、其の未經驗の事件に逢着したる時に於て 未經驗の事件に對して先例の準據すべきものが無く、隨て智慧の程度が解るから。

### 急ぎの手紙

織田信長の小姓森蘭丸が祐筆に向つて君命を傳へる時、

「これは御急ぎの手紙であるから、よく心を静めてゆつくり御書き下

と言つたといふ事が良齋閑話に載せてある。急ぎの手紙だからとてあわてゝ書けば、文字が粗略になつたり、事柄が前後したりして受信人が却つて迷惑する。何事も急いでは仕損ずる世の習、至急を要するものならば、殊更心を落付けて間違のないやうにすることが大切である。

主義のための免職

ニユーヨークの或銀行の頭取某が事務員某を招いて明日は日曜ではあるが特に出勤してこれこれの仕事せよと命じた。然るに其の事務員は、

『仕事は喜んで御引受け致します。けれども、日曜日に執務すること

は私の主義に反するから、たとひ頭取の命令とあつても之に従ふことは出来ません。』

と理由を明瞭に述べて、其の要請を拒絶した。頭取は怫然として色を作し

『それなら、此方にも覺悟がある、今日限り免職します。』

と最後の手段に訴へて、其の事務員を解備することに極めた。事務員も主義は免職よりも重しといつて、頭取の命令を絶対に峻拒したので、話の行掛上事務員は遂に其の銀行を退いた。

後、或人が銀行を創立したが、金銭出納係に適した正直な男が見當らず、其の周旋方を前の頭取に依頼して來た。所が、其の頭取はあれやこれやと物色した後、曩に解雇した事務員を推舉して、『あの男ならば安心して使へ



る』と付加へて遣つた。

### 金の生る木

山東京傳曰く、

武士の金の生る木は文武兩道なり。百姓の金の生る木は鋤、鍬、鎌の類なり。職人の金の生る木は鑿、鉋、鋸の類なり。商人の金の生る木は算盤、帳面なり。然れども之に肥料をよくし、朝夕心を付けて育てねば金の實が生らぬなり。

金の生る木の肥料といふは堪忍なり。堪忍したる目から見れば、三平二満も楊貴妃小町に見え、播鉢に植ゑたる唐辛も立田山の錦に見え、引窓から見る四角な月も、姨捨山の月も見ると目は同じ事なり。蒟蒻の白あへも求肥に見え、だばはせもきすと見ゆ。これ堪忍の徳にして、金の生る木の肥料なり。

### 悪中の善、善中の悪

菜根譚に曰く、

悪を爲して人の知るを畏るゝは悪中尙善路あり、善を爲して人の知るを急ぐは善中尙悪根あり。

と。人間修養の大道は實に悪中の善を積み、善中の悪を捨てることである

米大統領グラランドの大量

昔、米國の大統領グラランドは買切りの汽車で自分の村からワシントンの政廳、白聖館に通つてゐた。一日、婦人が途中の驛から其の買切りの汽車に乗込んだが、葉巻を燻してゐたグラランドを見て、

『私は煙草の臭が嫌ひですから、煙草を吸はずに下さい。』  
と、如何にも横柄な口調で言ひ捨てた。グラランドは之は自分の専用列車で貴女の乗るべきものではないとは言はず、婦人の言に従つて、咬へてゐた葉巻を窓の外へ抛り捨てた。汽車が次の驛へ着くと、驛長がやつて来て、婦人の同乗してゐるのを見て、

『此處へ乗つてはいけません。之は買切りの汽車ですから。』  
と叱つたので、婦人は顔を赤くして、如何にもきまり悪さうに降りて行つた。けれども、グラランドは其方を見向きもせず、何も知らぬ顔して郊外の景色を見てゐたとのことである。

商道

二宮尊徳、嘗て商賣の道を説いて、

凡べて商賣は賣りて喜び、買ひて喜ぶ様にすべし。賣りて喜び、買ひて喜ばざるは道にあらず。買ひて喜び、賣りて喜ばざるも道にあらず。貸借の道も亦同じ。

といへる、猶當世の弊風を矯むるに無量の力がある。

### 立身と亡身

梧窓漫筆に、

或老人の傳へたる言に、人は身を立てんと思はゞ、苦しと思ふ事を努め、苦しと思ふ家に立入るべし。それにて身は立つものなり。面白しと思ふ事をなし、面白しと思ふ家に立入れば、それにて身は亡ぶるものなり。

とある。志ある年少弱輩、殊に他家に奉公する者の服膺すべき金言である

### 故郷は忘れ難し

故郷は過去の記憶と未來の希望とを封じ込めた神聖な堂殿であつて、何人でも其の生れ故郷だけは忘れんとして忘れることの出来ないものである。英國の詩人バイロンは狷介不羈、而も放蕩にして世に容れられず、憤慨の餘り遂に飄然として其の故郷を出奔し、浮草の如く諸國を流浪して居たがそれでさへ猶生れ故郷が戀しくてならず、嘗て、

『余は死して空しく異國の灰となるとも、魂は尙故郷を愛する』  
と哀語したが、是實に偽らざる人情の發露である。また徳川十三代將軍家重の御臺所は雲の上より東へ下り給ふた御方であつて、何一つ不足のない

氣樂な身分であつた。けれども、なほ都の空が戀しくて堪らず、

思ふ事なき身なれども故郷は

名もなつかしき都鳥かな

と詠まれたのも、亦人情の自然である。

人は到底其の故郷を忘れることの出来ないもので、成功しても故郷を思ひ出し、失敗しても亦故郷を懐しく思ふやうに、人々の榮達汚辱は大抵其の故郷に傳はつて行く。故郷は實に其の人の反射鏡であつて、名譽も耻辱も故郷に知れ渡ることによつて其の度が倍加する。世の中の水平線下に沈んでゐる者は秘して其の故郷を語らず、少しでも羽振りのよい者は直ぐ其の故郷を語るのは之が爲である。また古人が、

富貴にして故郷に歸らざるは錦を着て夜行くが如し、誰か知る者ぞ。と云つたのは人情に合致した、意味の深い言葉である。

### 安住の樂天地

憂き事のなほ此の上に積れかし

限りある身の力試めさん

これは熊澤蕃山の作として傳へられてあるが、全く其の通り、人は何時までも何處までも運命に束縛されるものでなく、發奮することに依つて運命を變へ、束縛を脱するの自由を有つてゐる。併しもう一步考を進めて、憂き事のなほ此の上に積れかし